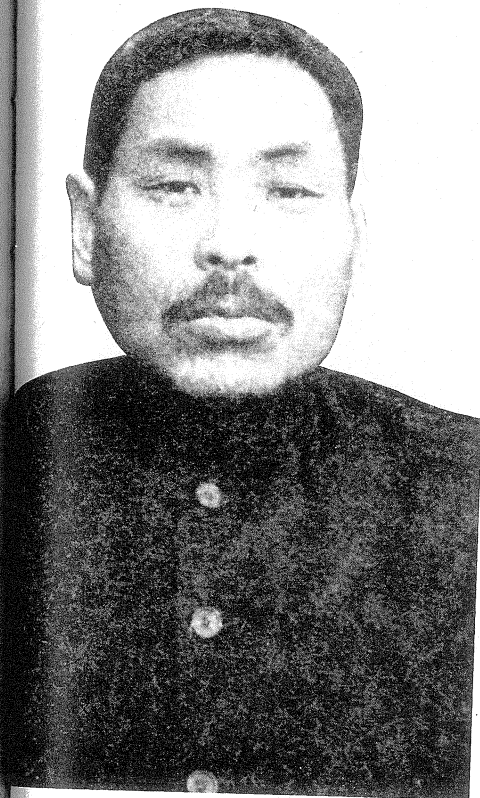


# 先生に学校を!! 人格校長の軌跡

都田忠次郎



## 校長退職で揺れる

昭和三年三月、鳥取県内の中等学校長のうち、三人が退職することになった。数少ない中等学校長の中で、一挙に三人の退職ということは前例がなかった。だから県教育界は大きく動揺したが、倉吉中学校では、それがもつとも深刻だった。

このとき、倉吉中学校長の都田忠次郎は、五六歳だったが、退職を指名された者の一人だった。予期しないことで関係者は驚いたが、ことに教頭の伴乙雄は、校長に殉じて辞表を提出した。県の行政当局は、教頭の辞職

を受け入れてしまった。このことから同窓会の反対運動が起こり、地域の社会問題にも発展することになった。

まず同窓会が倉吉町内で大会を開き、都田校長と伴教頭の留任を求める決議をした。その宣言の中に「我母校倉吉中学校は、県下中学校その歴史は浅しといえども、都田・伴両先生の如き人格識見ともに卓絶せる人を得て校風大いに興り、教化日に揚り、郷土を挙げてその徳風を景仰す。……教育の理想郷はまさに我が郷土に実現せられんとす」という言葉があった。これを破壊しようとするのが県当局だ、というのである。

同窓会の代表は、地域の有力者たちの応援を求めて県への陳情をしたけれども、県の方針は変えられなかった。そして、新校長は県外から迎えることになって、四月に入って発令された。

同窓会にも在校生にも強い不満が高まっているところに、新校長が着任することになった。その日の午後、倉吉に着いた校長は、人力車に乗って学校へ向かった。学校にいた生徒たちは招集されて、校門の前へ校長歓迎の列を作らせられた。

人力車で通過しようとする校長に、生徒が「降りてください」と言ったと伝えられている。また校長の後姿に向かって、生徒たちが



明治32年の大江磯吉（前列中央）と都田忠次郎（後列左から2人目）

「都田先生、万歳」と叫んだとも伝えられる。校長は不愉快な迎え方をされて、旅館へひきあげた。生徒たちは校長のあとを追って面会を求めたが、待たされる間には「天行の健なるを見て、自強息まざるは剛健なり、剛健は乾徳にして、男子の本領なり、男子須く堅忍不拔なるべし、雄大進取なるべし」と、都田校長が制定した校訓を唱えていた。

この事件に関して、校長は首謀者として二名の生徒を停学処分にし、七十余名に謹慎を命じた。さらに校長は三名の教師に退職を求め、校内改革を図ろうとした。このことから倉吉中学校はじまって以来例のない大ストライキが実行され、保護者や同窓会ばかりか地域住民もこぞって支持する事態になった。

新校長は、一学期間も在任しないで、年度中途の転任になったが、都田校長と伴教頭の復職は実現しなかった。そのために倉吉中学校の同窓生は、都田忠次郎を校長とし、伴乙雄を教頭とする学校を作る計画をたてることにした。

## 倉吉中学の黄金時代

都田忠次郎は、学生の着るような詰襟の洋服を着ていることが多かった。都田の生地は境港市だったから、言葉にはこの地方の弓が洪なまりが強く残っていた。都田が勤務した

のは鳥取市と倉吉市だったが、彼の弓が決ま  
まりは消えなかった。こんなことで、スマー  
トなところはどこにもなかったけれど、都  
田忠次郎が倉吉中学校の黄金時代を築いたと  
いわれる。

都田は大正九年四月から昭和三年三月まで  
八年間、倉吉中学校の校長として在職した。  
ここに着任したときから都田は、全校の修身  
の授業を自分で担当した。低学年は三学級の  
合併授業で、量數きの道場に正座をさせて講  
義した。授業は調息ということから始まった。  
生徒は正座して目を閉じ、自分の呼吸を教え  
ながら精神の集中を図るのだ。このときに笑  
い声でもらすものがあれば、落雷のような  
激しさで都田は生徒をしかりつけた。都田の  
授業で、人生に処する基本的なものを教えら  
れたと、卒業生たちは言っている。

都田校長は精力的な読書家で、手から書物  
を離すことがないほどだったといわれる。彼  
の授業は、そんな読書生活で支えられていた  
から、生徒に与える影響は強かった。

倉吉中学校は成立がおそく、伝統は浅かつ  
たが、都田の在任中に運動部の力が急伸した  
とくに昭和二年には、神戸高等商業学校主催  
の庭球全国大会に優勝し、その後の連続優勝  
に道を開いた。またこの年には、柔道部が竜  
谷大学主催の全国大会に出場して、これにも  
優勝した。このときには無届出場だったが、

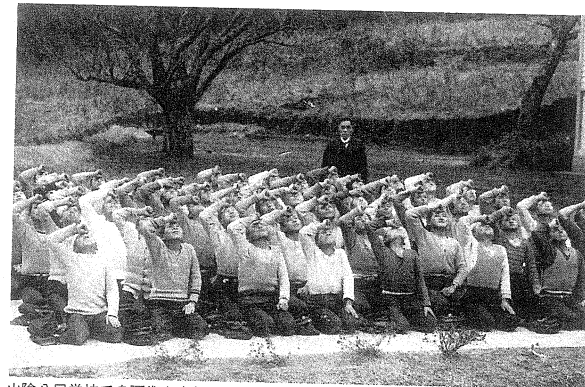
たのである。授業を担当したのは、中等教員  
資格をもつ倉吉中学校の卒業生で、ほとんど  
無報酬の奉仕活動だったという。この学校を、  
世間では「都田塾」と呼んでいた。地域の人  
たちは、黄金時代の倉吉中学校の姿をここに  
求めていたのである。

山陰公民学校は八年間にわたって経営され  
たが、当時の倉吉町に移管されて町立の商業  
学校になった。都田校長と伴教頭の二人が、  
ともに病気のために、設立の理想が守れな  
かったことも一つの契機になっている。しかし、  
この地方になかった商業学校を実現したこと  
う、歴史的な役割を果たしたことになる。

### 教師の生涯が残すもの

都田忠次郎は明治二四年の鳥取県尋常師範  
学校の卒業生で、卒業と同時に、附属小学校  
の訓導に採用された。在校中から、都田の人  
物が注目されていた結果であろう。都田は、  
師範学校入学以前に、「浜の目の聖人」といわ  
れた村上龍の私塾で教えを受けた。彼の母は  
「村上先生のような人になれ」と都田をよく  
さとしたという。

附属小学校教師としての都田は、教育会雜  
誌に五段教授法の学習指導案を発表するなど、  
県下の教育改良に積極的に取り組んだ。そこ



山陰公民学校で自強術を修行させているところ（昭和4年）

連休を利用しており、夜行列車で往復する  
というやり方だった。早朝に帰着すると、部員  
は校長宅を訪問して深くわびたが、校長は「一  
度勝たせてやりたかった。勝つてよかった。  
疲れているだろうが、今日は休まず授業を受  
けるように」と言って、とがめなかったとい  
う。

校長の飾らない人柄、確固たる信念、弓が  
決ままりの情熱的な雄弁、生徒に対する深い  
情愛などは、生徒や職員ばかりでなく、地域

の人たちの敬愛の的になっていた。

都田校長が伴乙雄を教頭に指名したことも、  
校風確立のうえの卓見だったといわれる。伴  
は数学を担当し、「慈愛と温情の聖者」といわ  
れながら、教壇上では理解させねばやまぬの  
情熱にもえる人で、生徒に深く信頼されてい  
た。

### 山陰公民学校の創立

都田忠次郎と伴乙雄の復職が不可能と分か  
ったとき、同窓生の中から新しい学校を作ろ  
うという声が起こった。これが倉吉地方の住  
民運動になって、一年後に山陰公民学校が実  
現することになった。それは、都田を校長と  
し、伴を教頭とする学校だった。

倉吉市余戸谷町に校地を定めたが、これは  
実業家の小川貞一によって寄附された。校舎  
の建設費は、倉吉中学校同窓生の寄附金によ  
ってまかなった。学校の設立には七人の代表  
者が責任を負うことになったが、そのほとん  
どは都田が着任する以前の卒業生だった。

山陰公民学校は、小学校卒業生を入学させ、  
三年間の就学をする各種学校だった。このこ  
ろ、不況の影響で中等学校への進学者は減少  
を続けていた。だから年限を短縮し、授業料  
も低くして、地域の教育要求にそうようにし  
て、大江の学究的な生活態度と明快な言説とは、  
附属小学校の職員から深い信頼を寄せられる  
ものであった。中でも都田忠次郎はもつとも  
大きく大江の影響を受け、哲学や教育学の研  
究を進めた。都田が修身と教育との中等学校  
教員免許を受けるようになったのは、ここに  
由来していると思われる。

明治三三年、大江は休職となって鳥取を去  
るが、そのとき同時に休職処分を受けた一人  
が都田忠次郎である。大江に殉じたと言っ  
ていいだろう。二年後に大江が死去したとき、  
都田は教育会雑誌に追悼文を書いて、「吾れは  
君を師として事へ、友として交わり、主とし  
て仕えき」と述べた。信ずるところに向かっ  
ては、何物にも恐れぬ気迫にみちたもので  
あった。

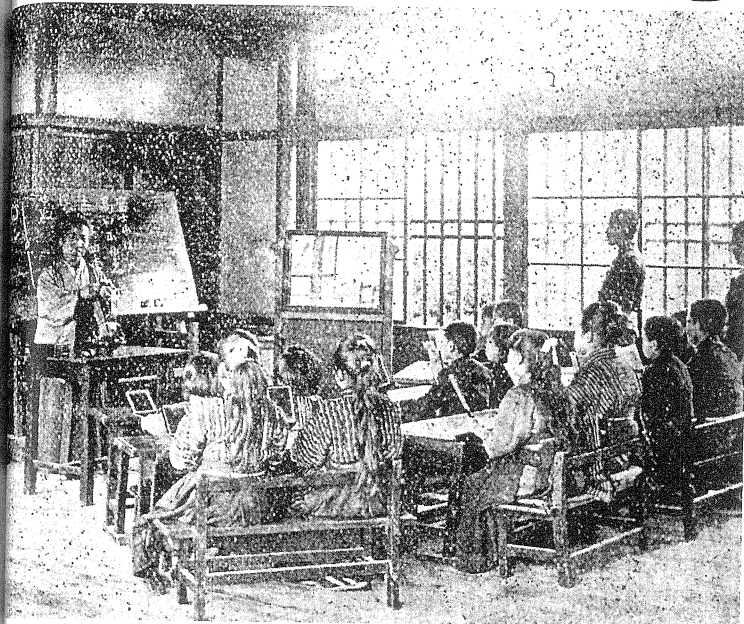
失意にあつた都田は、倉吉農学校に迎えら  
れ、その精励をもって期待にこたえた。さら  
に鳥取高等女学校の校長に就任し、ついで倉  
吉中学校の校長となって、黄金時代といわれ  
る名声を築いた。質素な生活を守りながら、  
高い精神性を求めてやまない都田の人格が、  
地域の教育に深い影響を残したのである。

（元県立青谷高等学校教諭 篠村昭二）



山陰公民学校の校舎（昭和5年）

# 盲児・啞児の慈母 福田与志



授業風景

- 一、しひたるまみに 学びえぬ  
教へ子思ふ ひとすじに  
さらにわけける 文の山  
すべてを愛の にえとして
  - 二、鬼神なかず まごころに  
園生の基さだむべく  
ながき月日の あらきばり  
いかに苦しき ものなりし
  - 三、ようやく根ざし とこのひて  
やがては花の香にみつる  
春をばまたで 花守りの  
君は行きけり 氷雨の夜に
  - 四、さはれ基礎 いやかたく  
残せる教へのりとして  
心こめたる つちかひに  
いよよさかゆる 園の花
  - 五、けふしも君が 面影の  
前につどひて かたりあひ  
いさをししのぶ このまどる  
いざみそなはせ ほほえみて
- 右は、盲児・啞児の慈母福田女史へ捧げた追悼歌である。毎年その命日に当たる十一月二十八日には、追悼式を行い、この歌をうたつて、遺徳を偲ぶことになっている。歌詞は難解であるが、追悼歌の性質上、このままで今もうたいつけられている。しかし、その後、盲啞学校が、盲学校と聾学校に分かれたので、歌詞の最初は盲学校では「しひたるまみに」

とし、聾学校では「しひたるまみ」としている。女史の戸籍名は福田ヨシであるが、七つ年上の兄福田平治（山陰育児院創設者）の妻がヨシだったので、まぎれぬように、妹のヨシを与志とし、妻のヨシをヨシ子とした。よつて、墓石にも福田与志としているが、この文の前段は、戸籍名のヨシを使う。

ヨシは、明治五年、父清七、母いその三番目の子として生まれた。福田家は、鳥取市で運送業をしていた。そのときの家族構成は、曾祖母、祖父母、父母、兄平治、姉千賀、ヨシの八人で、ほかに住み込みの雇人が三人もいた。

活動家の祖父平兵衛は、島根県庁御用の印刷所をはじめたため、祖母お仲と兄平治を伴い、明治一年に、松江に移住した（明治九年鳥取県は島根県に合併）。その後、祖父、次いで父が死亡し、ヨシが松江の人となったのは、翌二年の一月であった（姉の千賀と妹の民子を母の実家に残し、曾祖母と母と三人）。

明治一三年の松江での正月を、ヨシは曾祖母、祖母、母、兄、自分の五人家族で迎えることができた。兄の平治は一五歳になつたばかりでありながら、印刷業発展のために、め



ざましい活動をつづけていた。亡祖父の置いた礎石はゆるがず、祖母と平治の苦勞は、みりつつあつたのである。鳥取での父の死という経過によつて、再会した兄妹が、どのよう親密さを深めていたか想像されよう。

この年八歳のヨシは、二月五日、島根県女子師範学校附属小学校に入学した。折から錦織竹香女史が教生としてきており、鳥取弁のよくなる子として深く印象づけられたといふ。

明治一四年の春、五年前に合併した島根県から再び因幡、伯耆を分離し鳥取県となつた。それと同時に、目先の早い平治は、更に鳥取分工場を設置し、新県庁の印刷用途の命をうけるに至つた。

一方、ヨシは五月五日に「其方儀平素学事格別勉勵殊ニ行状正シク他ノ標準トモ相成候ニ付半紙一東賞与候事 島根県」の賞をうけたが、その松江女子師範学校附属小学校は、九月二〇日に廃校となり、九月二三日に、島根県松江師範学校附属小学校となつた。そして、翌明治一五年四月二五日、小学初等科を卒業し、「小学校初等科卒業候ニ付為書籍料金貳拾銭賞与候事 島根県」の賞をうけた。平治一七歳、ヨシ一〇歳である。

明治一九年、ヨシ一四歳、二月一五日に、附属小学中等科六年前期を卒業し、三月二〇日に、島根県師範学校へ入学志願し、三月一

日に仮入学、四月一日に本入学を許された  
とある。高等科卒を資格とする師範学校に、  
中等科六年後期にも達しない者が、入学を許  
されたことは、全く異例、ヨシの実力がいか  
に高く評価されていたかがよく分かる。

明治二十年、ヨシは一八歳の若さで鳥根県  
尋常師範学校（明治十九年八月五日、鳥根県  
師範学校を鳥根県尋常師範学校と改称）を七  
月一二日に卒業し、次のように即日訓導とな  
った。尋常師範学校ヲ卒業ス 鳥根県尋常師  
範学校 明治廿三年七月十二日ヨリ明治廿八  
年七月十一日マテ五箇年間小学校（高等小学  
校ニ於テハ女児）教員タルコトヲ免許ス 鳥  
根郡本庄小学校（注、本庄は松江市近郊の村、  
現松江市本庄町）訓導（月俸八円）鳥根県



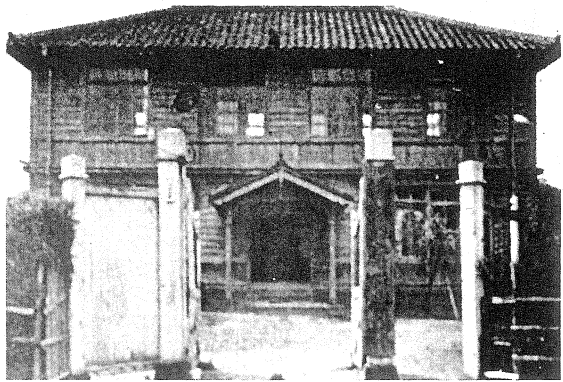
明治二十六年、平治氏二八歳、与志女二一歳  
となった。このとし一〇月に入るや、松江市  
は未曾有の大洪水に見舞われ、一〇日間も市  
街は水びたしになった。市民は少なからぬ損  
害をうけたが、このとき、松江銀行頭取松本  
敏次郎氏が多大の救済を行った。その美挙に、  
市民は深く感銘を受けたという。

明治二十八年に祖母お仲は七〇歳をもって病  
死した。鳥取生活五二年松江生活一八年の生  
涯であったが、松江移住半年にならないとき、  
夫平兵衛を失い、年少の孫平治を助けて家業

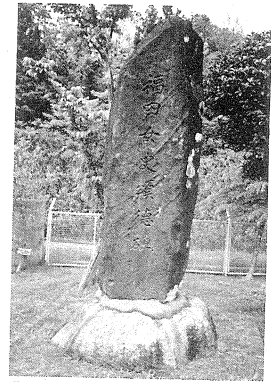
ていた。平治氏は、たえず協力してくれる妹  
と話しかかった。四月なかば過ぎた快晴の日  
曜日、平治氏と与志女と平治氏妻の妹内藤貞  
子女の三人は枕木山にのぼった。この時、平  
治氏は与志女に対し、盲児・啞児の教育につ  
いて研究するよう、しきりに吹き込んだ。思  
うに社会事業の深奥に迫りたいと考えて、教  
育専門職の妹を盲児・啞児の教育に当たらせ  
ようとしたのである。本庄校の校庭にも啞児  
が就学もせずに時々遊びに来る。そのような  
障害のある子を見るたびに、与志女の胸はせ  
つなかつた。自分はこのまま優良女教師で過  
してよいのか。兄の弱者救済の気持は自分  
にも流れている。何とかして、兄と歩調をあわ  
せたいという念がわいてくるのであった。

明治三十一年、与志女二六歳の五月、本庄小  
学校を辞し、前月視察した京都盲啞院の招き  
に応じて、同院の助教諭を拝命したのである。  
三三年四月、与志は一年出張のかたちで、東  
京盲啞学校訓導に任ぜられて、首都の空気を  
吸い、京都での盲啞教育研究につとめた。三  
五年、女史三〇歳、東京での勉強を終えて京  
都盲啞院に復帰し、孔子のいう「而立」に似  
て、女史の盲啞教育における識見と手腕は、  
ここに確立したのである。

三十七年、女史三二歳、京都盲啞院で、発育  
の学級を担当し、また女子部舎監として盲児  
とも寝食を共にした。そして、時々思うこと



私立松江盲啞学校



県立松江ろう学校に建つ頌徳碑



県立盲学校にある胸像

を隆盛ならしめたのである。現松江市殿町の  
県庁前の元勤銀支店所在地の印刷所は、博広  
社と称し、従業員三〇人を数えるほどになり、  
平治氏としても、苦楽を共にしてきた祖母の  
死は、祖父の死や父の死よりも、はるかに痛  
くひびいた。平治氏は、祖母の死を重くみて、  
何とかして、その霊を慰めたいと誓うところ  
があった。そして翌二九年正月、平治氏と与  
志女は、とくと話合う機会があった。その会  
話の内容は、二十六年の水害以来松江に浮浪児  
の多いこと、あの水害のとき松本氏の美挙が  
あり祖母が感心して口癖のようにほめていた  
ことであった。

このようにして、平治氏は与志女の全面的  
賛成を得て、その年の三月五日、第三一回の  
誕生日を期して、松江育児院の看板を、博広  
社玄関入口にかかげ、福田平治の社会事業が、  
始まったのである。六月末には、孤児九名を  
収容し、七月には孤児を市の阿羅波比神社東  
南の元宮司邸内に移し、一月には妻の実母  
内藤信子刀自が養育の手伝いをするに至った。  
明治三〇年は、平治氏三二歳、与志女二五  
歳の年である。育児院にいる孤児は二〇人を  
超えていた。孤児救済事業の発展策のみが念  
頭にある平治氏は、宗教的に新しい慰安の道  
を求めて、霊場枕木山（枕木山は本庄小学校  
附近）にのぼろうと思いついた。当時与志女  
は、勤務の本庄小学校の近くに一農家を借り

は、松江を出てから六年も経った。兄が待つ  
ている。松江にも盲児・啞児がいるというこ  
とであった。

明治三十八年、女史三三歳、四月に京都市盲  
啞院の職を辞して松江に帰り、盲啞学校設立  
の準備に取りかかった。四月二十六日には、松  
江市役所に出頭して、福岡市長に面接し、か  
つ八束郡役所に出頭して、盲啞学校生徒募集  
について依頼した。翌二十七日に、松江私立盲  
啞学校開設の申請を提出し、五月八日には、  
設立認可の指令を受け取った。このようにし  
て、五月二〇日に開校の運びとなったのであ  
る。当日の生徒は、盲四名（男一名女三名）、  
啞七名（男四名女三名）の計十一名である。  
仮校舎は松江市母衣町四〇八。思うに、兄平  
治氏の孤児救済事業に打ち込む情熱に感化さ  
れた与志女史であるが、自らを捨てて、盲児・  
啞児の教育に燃焼し、すべてを盲児・啞児のた  
めに尽くしたのである。

昭和三年五月二〇日、死後五〇年祭の年  
に当たって鳥根県立盲学校の玄関前に（当時  
松江市南田町一八九）与志女の胸像が設立さ  
れた。その台石の碑文には、「盲ろう啞教育の  
慈母福田ヨシ先生は、明治三十八年五月二十  
日、私立松江盲啞学校を創立に及ばれました  
が、経営の困難は甚大な心労を伴い、大正元  
年十一月二十八日、齢四十歳で昇天されまし  
た。（以下略）」とある。

（元鳥根県立盲学校教諭 石原政雄）

# 神と人との愛されて

## その生涯を女子教育のために

### 上代 淑



先生と語る上代淑先生

#### ふたたびの就任

山陽学園は明治一九年、岡山のキリスト教信者たちが外人宣教師の助力のもとに創立した山陽英和女学校を前身とする。上代淑は開校四年目の明治二二年、大阪の梅花女学校を卒業した一九歳のとき、なおすすんで勉学を希望していたが強く懸望されて、「神これを命じたまうが故に」ここに赴任し、裁縫・漢文・習字以外の全教科を担当する教師として、さらに寄宿舎の舎監として、自分よりも年長の生徒さえいた中で、岡山における教師生活の第一歩を踏み出した。教育者になることは、彼女の少女時代からの念願だったのである。キリスト教系の梅花女学校に学んだ彼女は、

はやくから米国マウント・ホリヨーク大学の創始者メリー・ライオン女史の名を知り、日ごろ「聖旨ならば、メリー・ライオンのような立派な教育者にならせたまえ」と祈っていた。来任にいささかのためらいがあったのは、まさにそのためであったが、その希望は明治二六年、二二歳のときに実現した。

マウント・ホリヨークはこの年、ただ一人の初めての日本人留学生上代淑を受け入れた。梅花時代から外人宣教師宅に寄寓して語学力は抜群であったが、四年間の留学中は死に物狂いの日々であった。専攻は生物学であったが、語学力の不足やら、クラスメイト七〇余人中たった一人の日本人だったことや、いまの日本人には思いもよらぬ苦闘の連続であった。

彼女の手柄と努力を認めてくれた心やさしき寮のルームメイトと校地内にあるメリー・ライオンの墓に詣でて、少女時代の決意をあらためて確かめる日もあった。

「わたしは決して秀才ではない。それゆえに一途に努力、努力でがんばった。それによって人なみに卒業できたのである」と、努力のたいせつさをつねに生徒に諭していた。

明治三〇年、バチェラー・オブ・サイエンスとなって帰国した彼女を待っていたのは、母校梅花女学校をはじめ新設の日本女子大学

校からの熱心な招聘であった。学長は彼女の梅花時代の恩師の成瀬仁蔵であり、アメリカ帰りの新進理学士にとつて願ってもない活躍の場を提供されたといえよう。だがそれらのすべてをこことわり、あえて山陽に帰任した。



第1回卒業生とともに(後列右から3人目)

英語・博物はもちろん、修身・地文・家事・音楽・体操と七科目を担当し、英語では徹底的に辞書を引くことを教え、音楽では楽器のない当時として音叉を用いて音感をとらえさせ、あるいは美しい声で英語の歌などをうた

い、二部合唱や輪唱の楽しさを教えるハイカラな先生であった。当時の岡山において最新、最高の知識を身につけている上代先生の授業は、やさしい言葉で例を多く引いてわかりやすく、そして授業の合い間には「……に感謝せよ」「未知の人にも挨拶をこちらから」と、社会人としての心得を説いた。やがてこれらは上代先生の「お守り帳」として全卒業生の生活指針となった。また、卒業式後の在校生・卒業生の送別行事として玄関前の石段で挙行される「さぎはしの歌」の儀式がいまも山陽学園にうけつがれているが、これは、マウント・ホリヨーク大学の伝統的行事が移植されたものなのである。

つねづね、ピースメーカー (Peace maker) になれと生徒に諭し、有志の生徒を誘って日曜学校の教師を務め、つづいて教会へ急いでオルガン奏者を務めるといった生活は、明治四一年の校長就任後も、その寄宿舎住いともにかわるどころがなかった。

#### 上代先生のお守り帳

一般的には、たいくつだが居眠りすることもできない校長先生の修身が、この山陽では全生徒によつて待たれ、そして卒業後も最も

印象に残る授業の一つであった。洋行帰りにもかわらず、紺がすりの単衣にメリンスと黒縞子の打合せ帯といった質素な姿で、先生は短いチヨークをていねいに使い、とうとう使えなくなるとそれを生徒に与え、ものの命をたいてせつにと親しく教えた。生徒は「お守り帳」と呼ぶ手帳をもっていて上代校長の訓話をメモし、つねに所持してくりかえし学んだ。それらはのちに「上代淑先生訓話集」としてまとめられたが、例えば、「感謝を胸あてとして、心いっぱいに充たし、奉仕の誠を服として全身にみなぎらせ」とこう申したいのです」と、彼女の教育の基調であり、同時に山陽の建学の精神でもあったものから、「一家の婦人が姑・嫁・親子の問題においてばかりでなく、その持ち前の優しさ、すなおさをだれにでも表わし、自分のまわりを愉快にし、明るくするということは真に大事な責任でございます」とか、「愚痴をいう事は人をも不愉快な気持ちにさせます」と、将来スマートな良妻賢母となるための教訓がこめられていた。

### オリブグリーンの風

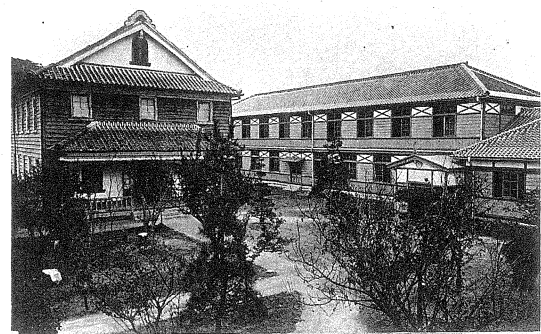
明治一九年、山陽英和女学校として発足した山陽学園は、山陽女学校、山陽高等女学校として現在の女子中・高等学校に昭和四四年は山陽高女家政専攻科となった。

家政専攻科は家事、裁縫に重点を置いたが、家政のみに偏することなく、倫理学、心理学、論理学、国文学、英語、法制経済などの一般教養を重視し、有名音楽家の演奏会や各界名士の講演会など独自の文化行事を実施した。そこには、当時の日本で一般的に教育ある女性とされた高等女学校卒業者が、「まず目ざめて、精神的にも、肉体的にも、形式をはなれ虚礼を廃し、理解ある日々を工夫しなければならぬ」（大正八年、同窓会講演）というかねてからの上代の持論が盛りこまれていた。将来は総合女子大学までが考えられていたが、「私の力の足りなさを残念がっているのをごいいます」と昭和一五年の創立記念式で告白した。遺志は養嗣子上代皓三による昭和四四年の短期大学開設で、ようやく一部が実現されることになった。

### 「灰の中より立ち上がりましよ」

第二次大戦は、愛と奉仕の精神に生きる上代淑の事業を御破算にしたかに見えた。愛する学園は昭和二〇年六月の岡山空襲により完全に焼失した。

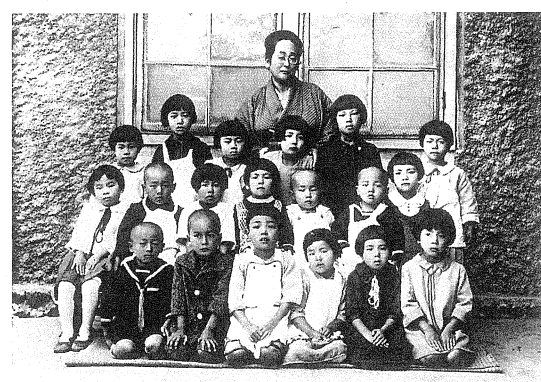
開学の山陽学園短期大学をもつ学校法人となるが、その間つねに愛と奉仕の精神を堅持しつつも、あえて教会に経営をゆだねることを



1905年落成の新校舎

しなかった。そのため当初から明治三〇年代前半までは幾度かの経営危機に直面した。しかし山陽は、石井十次の岡山孤児院とか旭東日曜学校への支援、奉仕を怠らなかつた。上

廃虚で開かれた最初の職員会議の冒頭の上代校長の言葉は、「灰の中より立ち上がりましよう」。不屈の第一声であつた。



淑先生と日曜学校の子どもたち

ある日曜日、米軍兵舎内の教会に招かれて礼拝説教をおこなった上代は、静かな語りかけて若い占領軍兵士の不行跡をたしなめ、民

代淑は実に没年まで日曜学校の教師をつづけていた。

また、創立記念日その他の機会に開かれた講演会の講師には、阿部磯雄、新渡戸稲造、久留島武彦、姉崎正治、ガントレット恒子らの名が見られる。これらの多くは上代どの個人的交友や本校元教師といった人々であるが、これら知名士により山陽の名は世に広まり、県外女学校長の視察があいついだ。

さらに教頭に入沢賢治を得て、庭球・排球・籠球部の育成に成果をあげ、これらスポーツの県代表といえは山陽の名が定着した。文化・体育の両面においてスクールカラーのオリブグリーンのさわやかな風は、岡山のみなならず全国的に広く知られ、いつしか上代淑の名前と山陽高等女学校の校名は不可分のものとなった。岡山県人ですら、山陽の創設者は上代淑と思ひこむまでになったのである。

### 社会と婦人

上代淑は、多くの女性が近代的な女学校教育を終えるとともに、ふたたび日本の因習的世界に埋没していくことに着目し、はやくから卒業後のアフターケアの必要を痛感していた。それが同窓会の講演会などになったが、他方では明治四四年の山陽裁縫塾の開設とな

主義の先輩国民として日本に欠けている社会道徳の範を示すべきだと論し、また女性を尊敬し、祖国の母を悲しませることのないようにと結んだ。説教が終わると将校も兵士も壇にかけ寄って握手をもとめ、中には故郷の母を思い出したと涙を浮かべて抱擁する者もあつたという。

「神と人どに愛されて……」と刻して、養嗣子であり、のち山陽学園短期大学長となった故人の遺志を継承、発展させた生化学者・アラギ派歌人の上代皓三がその墓碑の碑文とした上代淑は、簡潔な銘文そのままに、キリスト者として、また山陽高等女学校長として、明治二年以来、昭和三四年八八歳をもって昇天するまでの七〇年間を岡山の女子教育に献身した。上代淑は、いま山陽学園短期大学を見おろす岡山市平井笹山の墓地の簡素な石碑の下に眠っている。

『神と人どに愛されて』  
その生涯を女子教育の為に捧ぐ』  
墓碑銘の全文

就実女子大学非常勤講師 富岡敬之  
山陽学園短期大学非常勤講師

# 一隅を照らす人になれ 独創教育の実践

檜 高 憲 三



はじめに

檜高憲三は、広島県賀茂郡西高屋村（現在は東広島市）の出身である。大正六年（一九一七）三月に広島県師範学校を卒業し、郷里の西条尋常高等小学校訓導として三か年間在職した後、特に選ばれて母校の附属小学校訓導に就任した。そこで、千葉命吉主事の独創的な教育理論の指導を受け、そして、大正一二年（一九二三）四月、二六歳の若さで、前任校である西条小学校長に抜擢され、千葉理論に基づく実践に力を尽した。

彼は、人間が本来もっている独創性を啓発助長することによる個性の完成をめざす西条教育」を合い言葉に、独創性を育てる原動力として、「何事も自ら進んで正しく強く優しく永くやります」の校訓を設定し、それを軸に、

あらゆる教育諸活動を有機的に組織することにも、合理的な学校経営に専念した。

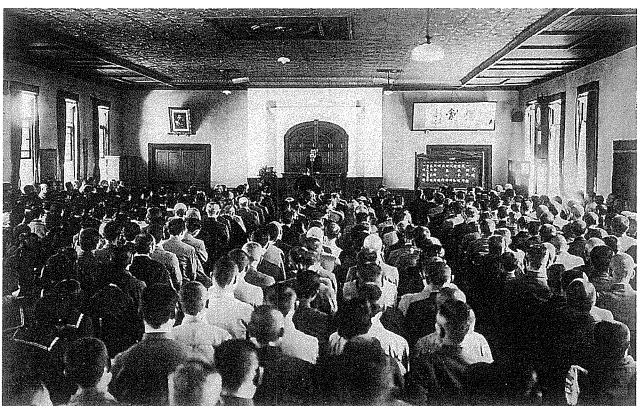
こうして、独自の「西条教育」をつくりあげていったのである。檜高校長の情熱と理念は、やがて全町の認めるところとなり、さらには、全国の教育界に影響を与えることになった。

彼は、昭和二年（一九四六）、戦時中の翼賛壮年団長の責で退職するまで、二三年の長きにわたって西条小学校長を勤めた。

校長退職後も、彼の始めた西条教育は、よき後継者、池田弘校長によって受け継がれ、進展を続けた。毎年二日間の日程で開かれていた西条教育研究大会について当時の新聞は、「全国各地から二〇〇余名が参加」と報じている。檜高校長の信念は昭和三四年に西条小学校がほかの三校と統合するまでの三七年間とされることなく、受け継がれ、日本の教育実践史上に輝かしい足跡を残している。

## 教育観と業績

当時、西条町では、諸問題の打開策を模索する中でその活路を教育に求めた。本気で教育をやってくれる人物として弱冠二六歳の檜高青年に白羽の矢が立ったのである。まさに、教育人事の大英断であり、当然、教育界では大きな話題となった。



西条教育研究大会

こうして、就任した檜高校長は、なんとしても「町を救う教育」をやらねばならない。それには、千葉主事から教えられた「独創的な教育」を実施することが有効であると彼は考えた。

「救う」とは、対立的・一面的な考え方をもちことなく、根本的統一を求め、新しいものを生み出す独創精神を、学校を中心に、町に広めていくことであるとの認識に立った。

彼は、酒の都、西条の教育的条件などの実態をもよく把握して、教育改革にのりだしたのである。彼の教育観と実践は次のようにまとめられることができる。

第一は、西条文化の向上である。

教育を学校教育という狭い範囲で考えず、広く社会教育を含めた教育文化圏を構想していた。よい子どもを育てるために、学校を核として大人も子どもも含めて、地域住民の間に、人間的な連帯感を深めることによって、学校を地域のものにすることができると考えた。そのために、各種の行事を計画し、組織化していった。学校と地域との共同体としての教育を推進することによって、町を救う人間を育成することができるといふものであった。こうした構想とその実践は、明らかに住民の民主的な意欲の創造を育てることになった。

しかしその構想を実現するためにはもちろん多くの困難もあった。特に、彼が若すぎたため、封建的な町の風潮に、なかなか勝ち

てず、理解されにくかったということである。「今日もやられた」と口ぐせのように言っていたというエピソードもある。

ところが、彼の粘り強さで、種々の構想を漸次推進させていき、ようやく、「この校長がきてから、学校がよくなった」といわれるようになっていったのである。

第二には、千葉命吉に習った理論の導入である。

すなわち千葉理論を具体化し、効果をあげることにあった。千葉理論とは、教育に本質的に含まれている二律背反的問題を創造的統合によって克服するというものであった。彼は、千葉理論のうち、実践上から納得ができて、効果があがるであろうと予想されるものを積極的に取り入れようと努力した。

また檜高校長は、千葉から習得したこの理論を「独創教育要領」といわれる小さなパンフレットにまとめた。教頭の井上節夫と夜遅くまで、その要領の一字一句をいかに解釈し、学校にどのように取り入れるか議論を重ねたという。疲れていねむりをしたすと、二人の間に水を入れた洗面器を置き、どちらかが洗面器の中の水をかけあうことにしたそうである。「檜高校長は、教育に命をかけていた」と、その当時を知る多くの職員の語り草となっている。

やがて、彼は、千葉理論をうのみにするの

一隅を照らす教育をしなければならないと説き、子どもには、一隅を照らすような人間になるよう努力することを教え、そのような配慮を教育の隅々にまで徹底させようとした。

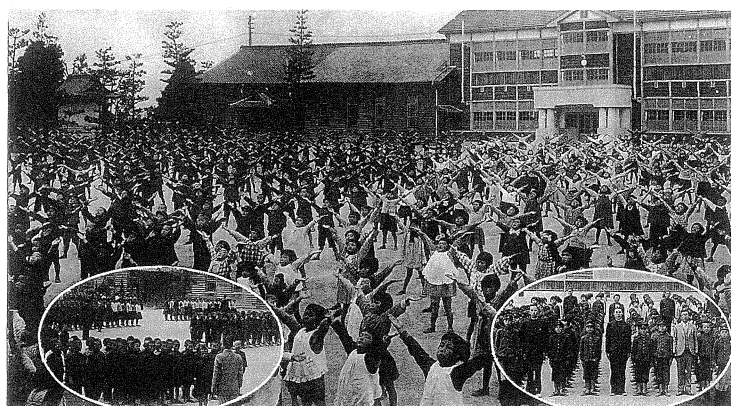
もう一つのとらえ方は、指導法に結びつけた解釈である。すなわち、教育内容の最も本質的な一隅に光を与えることによって、全体への類推を働かせるようにすることである。子どもたちが学習内容を直観的にとらえることができるような最も本質的な発問をする必要性を説いている。

第四には、西条小学校を日本の教育のモデル校に育てることであった。

西条教育を単なる地域の教育としてのみ育てるのではなく、その教育努力によって生みだされる教育理念とその技術を、広く全国に紹介し、日本の教育全体へ貢献することを意図していた。その意味では、彼は郷土を愛し、国を愛した人であった。

西条小学校を日本の教育のモデル校にするために、檜高は校長を中心とした教職員の間互協力にとりわけ力を入れた。平素よく読書をすすめる、教職員各人が読んだ本の中で、重要と思うところに線を引き、校長に渡す。校長も読んだところを教職員に紹介し、相互に考える機会をつくった。

また、教職員相互研修の場として、特別な



西条教育学校朝会体操

ではなく、郷土や学校に適した、独創的な教育をうち立てなければならぬことに気づきはじめ、千葉理論ではない西条独自の教育を推進していくことになる。まさに、模倣から創造へと大きく転換して行くのである。

檜高が独自の実践的教育論を樹立できたのは、「郷土を救う教育」という信念を、かたときも忘れなかったからであろう。また、この信念が、町民の協力を得ることに資するところとなり、多くの人たちから歓迎されたゆえんである。

第三には、檜高憲三自身の人生観の具体的実践である。

彼は教育観の中心に「一隅を照らす人間を育てる」という信念をもちこの言葉が次のようにとらえて、教育的意味をもたせていたようである。その一つは、人間には一人ひとり長所も短所もある。早く覚える人、遅い人もいる。しかし、何一つできない人はいない。なんでもよい、自分の能力を生かしながら、持ち場持ち場で、明るく輝く存在に、世の一隅に光を放つものになれという意味にとらえていた。ひと言でいえば、なくてはならない人になれということである。これを檜高校長自身の人生観とするとも、教育の信念にしていた。

それゆえ、教師には隅々にまで目を配り、

「独創塾」という建物を建設している。

他方、彼は、毎年六月、研究発表大会を開催し、常に研究成果を世に問うたのである。

昭和三年（一九二八）六月一日に第一回研究発表会をしてから、戦中、戦後を通して、一回もとぎれることなく、三〇回という長期間にわたって、一貫して「独創教育」を研究し発表してきたことは、まさに驚異的な出来事であった。

檜高憲三は、校長を辞職後、視聴覚教育に尽力し、追放解除後は、県会議員一期、西条町教育委員長、県PTA連合会長、県私立各種学校連盟会長などを歴任した。

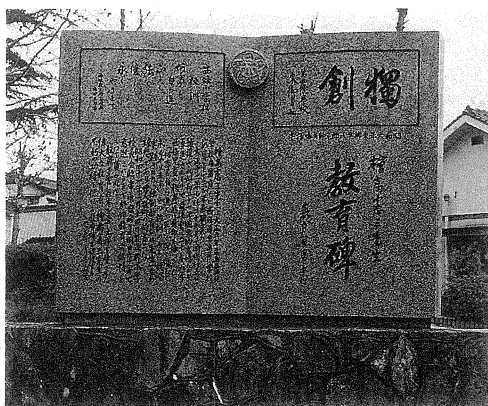
昭和四一年（一九六六）一月、賀茂郡小学校長会の研究会へ出席し、講演を終えて降壇した直後に倒れ、同日、西条町の教育の土台を築いたその生涯を終えた。時に六八歳であった。

この偉業を後生に残そうと、檜高憲三教育碑が西条町御建神社境内に建てられている。

（東広島市立西条小学校校長 重光 守）

#### ●参考文献

- 扇田博元著『独創教育への改革』（第一書房）
- 檜高憲三著『西条教育の実践』（みかつき社）
- 檜高憲三著『西条教育』（第一出版）



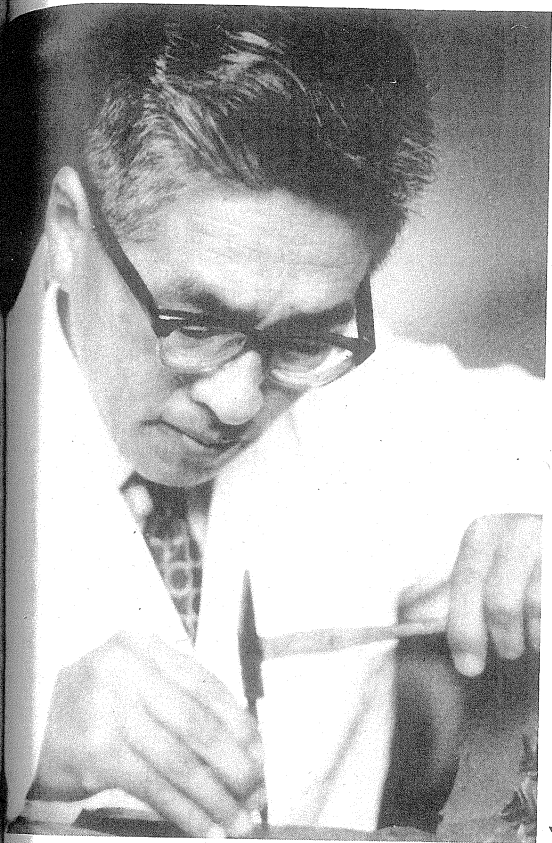
御建神社境内に建つ檜高憲三教育碑



# 太古のロマンを求めて

## 化石調査に情熱を傾けた教育の実践者

# 岡藤五郎



### 業績の概要

昭和五五年一月、美祢市及び周辺から産出する化石を一堂に収め展示した美祢市歴史民俗資料館がオープンした。この資料館にある化石を収集し、化石の宝庫美祢を全国に広めたのが、化石調査に一生を捧げた高校教師岡藤五郎であった。

高校教師として三〇年間、そのほとんどを郷土の山口県立大嶺高等学校に勤務し、授業のかたわら化石の採集・研究に没頭した。美祢の地域は秋吉台カルスト地帯及び大嶺無煙炭田の地層を有し、学術上日本列島形成のナゾ解きができる重要な地点とされている。ここでの古生物の研究の推進は、化石の発見を手がかりとしているため、彼のように土地に定着して、この道ひとすじの献身的な調査研究に負うところが極めて多い。

彼は三〇年間に約一〇万点にも及ぶ膨大な化石を採集し、その中には国際的にも貴重な資料といわれるものも少なくない。日本最古の昆虫化石のオカフジムカシゴキブリやシダの仲間のアステロセーカオカフジなど、彼の

### 化石研究者への道のり

呉服を商うしにせの長男として生まれた五郎少年は、元気に川で魚を追いかけ、野山を駆け歩き、のびのびと、自然を友として育った。

素直に自然の中に溶けこみ、動植物を相手にものごとを考える少年であったことがその後の彼の生涯を決める大きな要因になった。

終戦の年、県立豊浦中学校(現豊浦高等学校)に駆け出し教師として赴任、六年間勤めた。明瞭で積極性のある彼は教壇だけの教師に満足することなく、生徒を連れて関門一帯の古生物(化石)の調査を始めた。

戦時中の要塞地帯で、立入禁止されていた地域への出入りが自由になったことも幸運であった。

時には駅頭で警官にリュックサックを調べられ、中から石ころばかりが出てきたことから変わった人だと驚く警官に対し、当の彼は笑顔で相手の驚きを見つめるばかりであったという。化石先生の面目躍如たる話である。当時、採集された化石はアンモナイト・貝類化石が主であった。

昭和二十七年、郷里の美祢市に待望の県立大嶺高等学校が新設されるや彼も望まれて着任した。周知のように美祢市一帯は、長門構造

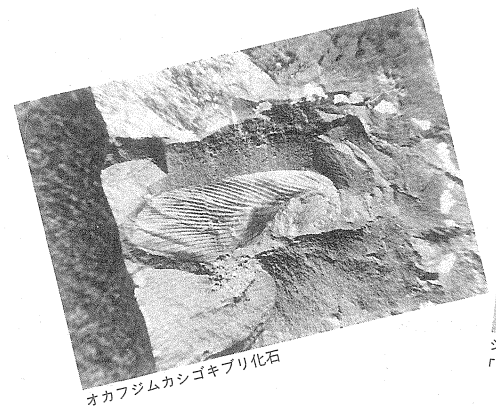
名前を冠したものが数点に及ぶのもそのことを物語っている。

また、全国の大学・博物館の専門学者との交流を深め、一三の学会に加盟して論文を発表するなど斯界の期待にこたえた。また、大嶺高等学校に異例とも思える展示館を開設し、年間二〇〇人にも及ぶ見学者や採集者を迎えて、参観者にも温かく明るい笑顔に情熱をこめて対応し、広く「化石の先生」と尊敬を集めていた。

しかし、積年にわたる過労から心臓を病み、秘かに体力の限界を知りながら、調査研究中断することなく続けていたが、昭和五三年七月の炎天下、化石採集の現場で倒れ、遂に五三歳の生涯を終えた。

### 略歴

- 大正一三年 美祢市伊佐町に誕生
- 昭和二〇年 旧水原農林専門学校博物科卒業
- 同年 山口県立豊浦中学校(現豊浦高等学校)教諭に採用
- 昭和二十七年 山口県立大嶺高等学校創立と同時に着任
- 〈受賞〉 従五位勲五等瑞宝章、中国文化賞、山口放送賞、美祢市学術文化功労賞、日本生物学会賞、日本学生科学賞(指導者)



オカフジムカシゴキブリ化石



シダの仲間(胞子のついたシダ化石)「アステロセーカオカフジ」

帯を核として、日本列島形成にかかわる古い地層群を有することから、彼の化石調査への夢は広がるばかりであった。

秋吉台カルスト地帯、大嶺炭田は化石のメッカであり、郷里でもあったことから、住民との交流も多く「先生、こんなものが」と化石や骨片を学校や自宅にまで持ち込み、情報を伝える人は年を重ねて多くなった。

当時、秋吉台を米軍空爆演習地にどの要求があったが、地元住民、学者、文化人一体となつての反対運動により結局沙汰やみとなつた。これを契機として、秋吉台周辺の学術的価値は高く評価され、同時に美祿市における石灰岩台地は、石灰・セメント産業による大規模開発が着手され、他方、大嶺炭田も増産体制が敷かれ、地下資源開発の活況は日に日に隆盛を極めた。このようになるや学術的な調査・研究・採集は関係者の間で必然的に注目を浴び、彼のまわりは多忙を極めた。

彼のような第一線の「目」が重要な意義を持ち、彼と分類学専門の学者との交流は日を追って深まっていき、彼は学界からも認められるようになることも、彼の研究も一層充実さす増した時代でもあった。

### 人間の生き方を教える

彼は教師としても優れた教師であった。上

○近い洞穴があるが、当時、大半は人跡未踏のものだった。彼は大嶺高〇Bを中心としたケービンググループ「こうもり会」とともに全部の洞穴を探索した。洞窟調査の近代化を指導する一方、オオツノシカの化石やトラの骨等を見出し、この世界に大きなセンセーションを巻き起こした。

もう一つは、昭和四三年大嶺炭田の露天掘現場での植物化石群の発見であり、その収集は彼の生涯での一大快挙であった。

企業側の入山に対する厳しい制約の中で、勤務を終えると連日採炭現場通いをした。陽が落ちて暗くなるまで採集し、邪魔にならない場所へ重い石塊を移動する作業を一人で行った。

汗と力と情熱の結晶はトラック数台分となり、大嶺高等学校に運ばれて、見る人をびつくりさせた。これらの化石は整理された上、国立科学博物館をはじめ全国の大学、更には外国にまで分譲され多くの研究者から感謝された。

### 夢は太古のロマンを求めて

彼の調査活動で収集した人骨は洪積世のものか？と、東大の鈴木尚教授も注目し、調査もされた。結論は慎重を要することで断定的



美祿市歴史民俗資料館



岡藤五郎氏胸像

司や教職員仲間からも信頼が厚かったが、なんといつても生徒から尊敬されていた。授業にも情熱的で、生物進化の話にでもなると生徒も時のたつとも忘れるほどであった。課外活動の生物クラブの指導業績にもめざましいものがあり、第一〇回日本学生科学賞をはじめ、数々の受賞がその業績を物語っている。

彼の薫陶を受けた人たちは、今それぞれの職にありながら、彼の遺志を継ぎ各地で化石調査、研究に精進している。集まると必ずその話題は岡藤先生の情熱あふれる教師としての教室、野外、自宅を問わない研究者としての生きざまが教えた人間味や、人としての生きざまが教えた子たちに伝わったからである。

少ない時間を研究に没頭し、地方の一高校教諭というハンデを克服し、古生物各分野、地学、人類学、考古学等々の文献をひもとき研さんを深めた。「私は専門学者ではないが、化石を調べるためには、幅広い知識が必要だ」とし、さらに「研究を一人のものとしてはならない」と常に語っていた。

岡藤五郎の残した業績はこれまで紹介したように数多くあるが、その一つに洞窟探査がある。

秋吉台一帯には横穴、竪穴、複合穴と三〇

なことは言われていないが、彼は、人骨の出土伊佐という地名をとって「伊佐原人」と命名したいという気持ちを持っていたという。

日本列島にいつから人が住んだか、この研究は学界最高の焦点である。彼はこの地方から大陸動物の骨が出ることは、きつと先住民の骨も出るはず……と、心ひそかに期待をかけた夢を求めている。

「毎日が教育と研究で楽しい。植物化石、洞穴生物、プランナリア(扁形動物の一群)、ミジンコ、カタツムリ、哺乳動物と手を広げすぎていくが、体力が続く限り調査したい」とレポートに追記している彼も、昭和五三年七月二〇日の午後、突然襲った心臓発作で倒れ再び立つことはなかった。美祿市にも、学界のためにも惜しんでも余りあるものがある。

彼は生前から、発掘採集した一〇万点に及ぶ化石を、全国の研究者、見学者のために開放した。そしてそのための充実した化石博物館の設置を美祿市に念願していた。市も彼の遺志を受け、現在、美祿市歴史民俗資料館として実を結び、岡藤五郎の生涯をかけた功績が納められている。

(山口県美祿市教育委員会教育長 岩野和夫)

徳島が生んだ世界的な人類学者・考古学者

鳥居龍蔵



日本人類学・考古学の先駆者

平成元年度に日本全国で開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、約二万五〇〇〇件にもおよぶ。先史時代から中近世にわたり土地に刻まれた先人の生活の足跡が解明され、歴史上の新しい事実が次々と発見されている。

今日、ブームともいえる隆盛をみせる日本人類学・考古学も、明治・大正・昭和初期はその黎明期であった。そのような時代にあつて、斯学の基礎を築き、それを東アジアの視点から世界的水準にまで発展させた人に鳥居龍蔵がいる。

鳥居は人類学・考古学・民族学を独学で修め、今日では学問的方法として一般化しているフィールドワーク（野外調査）を最初に導入し、遺跡、遺物や生活用具を生活史の立場から実証的に研究した人である。

彼は明治三〇年代から昭和一〇年代まで東アジア・内陸アジアからラテンアメリカおよび日本国内を精力的に調査し、今日いう「東アジアの視点」から考古学や古代史を開拓した先駆的実践者であった。

鳥居の名は世界的に有名になったが、それは、少年時代にいだいた初一念を貫き通すべく絶えず新鮮な目標をかけた、たゆまず続けをやめさせられ、まったく独学で勉強してきた」と語っている。

坪井正五郎との出会いと東アジア調査

明治一九年（一八八六）、一六歳のとき東京に人類学会が組織されたことを雑誌で知って入会する。これがやがて彼の学問的方向を決定づけることになった。

やがて、人類学会幹事であった坪井正五郎との文通が始まり、その指導を受けて徳島市近郊の遺跡を調査している。

坪井の勧めもあり、明治二五年（一八九二）家族とともに東京に移住し、翌年、東京帝国大学理科大学人類学教室整理係となつて、本格的な人類学・考古学の勉強が始まったのである。

明治二八年（一八九五）東京人類学会から派遣されて中国の遼東（リャオトン）半島および東北部の調査を行った。これが鳥居の海外調査の第一歩である。この調査は日本の人類学・考古学によるアジア大陸研究の最初であり、二五歳の若い学徒がその第一歩を踏み出したのである。

明治二九年（一八九六）から三三年（一九〇〇）までの間、鳥居は東大から派遣されて四回におよぶ台湾先住民の体質・言語・民俗などの調査を行った。この間、明治三二年

た努力のたまものであった。

少年時代

鳥居は明治三年（一八七〇）に徳島市船場町（現同市船場町一丁目）で代々阿波藩の煙草の大問屋であった鳥居家（父新次郎、母トク）の次男として生まれた。鳥居少年は、物をきちんと整理する母のきちょうめんな性質を受け継ぎ、少年時代から収集品を完璧に整理整頓したという。これが後に研究資料を収集し、整理することで研究を行う人類学や考古学の分野で、世界的業績を残すことになったと考えられる。

観音小学校（現徳島市新町小学校）に入學するが、家で思うままの生活をしてきたためか学校生活にはなじめなかった。しかし、教科書「小学読本巻一」の最初に掲載された世界の五人種に興味をもち、これが人類学に関心をもつ契機となった。

小学校時代に富永幾太郎の感化を受け、人と自然との関係に関心をもち、その後、歴史、地理、博物などの書物を読み、古墳や石器などを探すことに興味を持つていった。

鳥居は昭和のはじめ、ある新聞記者の取材に「私は少年時代から地理・歴史が好きで、好きなことばかり勉強していたため、小学校



白塔と鳥居博士夫妻（昭和5年慶州城跡にて）

(一八九九)に北千島に千島アイヌの調査を実施し、石器時代の日本人について、当時行われていたアイヌ説等の論争に影響を与えた。

明治三五年(一九〇二)台湾先住民族との比較のため中国南西部の苗族(ミャオ族)の調査に東大から派遣され、今日みられるこの地方の少数民族の焼畑農耕文化に日本民俗文化の起源をみることを七〇年も前に取り上げ注目したのは鳥居であった。

明治三九年(一九〇六)から四一年(一九〇八)にかけて、きみ子夫人と二人して東アジア全域にわたる調査に赴いた。鳥居の研究調査は、中国の中央部をのぞけば東部アジアの全域にわたり、大正一〇年(一九二二)にその成果により東大から文学博士の学位を受けている。

鳥居の海外調査で注目すべき点は、昭和三年(一九二八)、五年(一九三〇)には夫婦で、同八年(一九三三)、一〇年(一九三五)には次男、長女の一家四人で家族による調査を行ったことである。

きみ子夫人は、鳥居の個性や仕事のよき理解者であるとともに、学問上の協力者でもあった。二人は明治三四年(一九〇一)に結婚している。彼女は学者の妻として生きぬいた女性であった。東アジアにおける研究調査では助手を務め、一家は現地服を着て、その地方の言葉話し、その地方の生活にどけこ

とであった。第一次大戦後の大正デモクラシーの風潮にあずかったと鳥居は親しかった笠井藍水(郷土史家・海部郡日和佐町出身)に述べている。

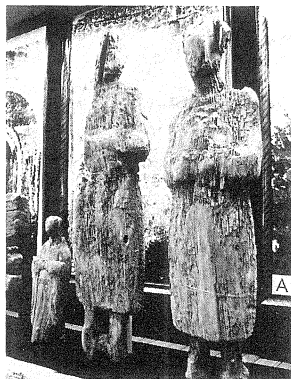
大正一三年(一九二四)、東大助教を辞職し、国学院大学教授となった。さらに、昭和三年(一九二八)には上智大学の創立に尽力し、教授・文学部長として活躍した。

昭和四年(一九三九)に中国北京の燕京大学から客員教授として招かれ、昭和六年(一九五一)に退職して帰国するまで北京において研究が続けられた。

昭和二六年(一九五一)二月に中国から帰国し、同二八年(一九五三)一月四日、東京において、この学問の開拓者として大きな業績を残し、その生涯をとじる。

八二歳であった。

昭和四〇年(一九六五)に、徳島県は、鳥居の世界的な業績を顕彰するため、鳴門市妙見山公園山頂に徳島県立鳥居記念博物館を建設した。同館構内の小庭園には、博士が中国において最初に発見したドルメンをかたどった支石墓がつくられ、きみ子夫人とともに静かに眠っている。



徳島の皇帝陵(慶陵)に副葬されていた木偶

んで調査を行った。

## 国内調査

明治二〇から三〇年代には東京近郊や岐阜、近畿地方、南西諸島の調査をしている。鳥居は大正五年(一九一六)に武蔵野会を創設し、機関誌「武蔵野」を発行し、武蔵野の文化史研究の指導的役割を果たしている。

郷土徳島には明治二九年(一八九六)の那賀郡木頭地方の民俗調査をはじめ、大正一一年(一九二二)には、徳島市城山の貝塚を発見し、徳島の先史時代の姿に学問の光をあてた。

## 教職時代

鳥居は明治三一年(一八九八)に東大助手に任ぜられている。大正二年(一九一三)恩師の坪井正五郎博士が外国で客死した後に、博士の後を受けて講師として考古学・人類学を講義した。

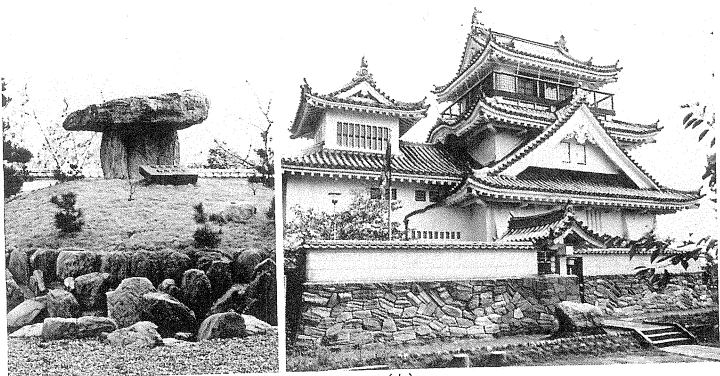
理学部教授会は彼を講師待遇のまま人類学教室主任にし、大正一〇年(一九二二)学位を受けたことにより、翌年、助教となり、教授同様に講座を担当、教授会にも出席する権利を与えられた。講師生活が長かったとはいえ、当時小学校中退の「博士」は異例のこと

平成二年五月二四日、中国考古学会の第一人者である安志敏(アン・ジミン)中国社会科学院考古研究所教授は、県立鳥居記念館を訪れ、三九年前中国で別れた鳥居博士夫妻と、墓前で再会した。安教授は北京の燕京大学二年生の昭和二年(一九四六)に鳥居と出会い、鳥居が昭和二六年に帰国するまで師事した人である。

安教授は、「フィールドワークを重視し、幅広い視点から考察する博士の研究姿勢に強くひかれた。また私の中国考古学者としての基礎を固めてくれた。鳥居先生は私が中国で初めて会った日本の考古学者で、常に優しく、丁寧に教える人であった。研究も興が深く幅広かった。今の若い人たちには偉大な博士の業績はあまり知られていないが、大いに紹介する必要がある。日本を訪れるのは六回目であるが、ようやく念願の墓参りができて非常にうれしい」と記者団に語っている。

### 【参考文献】

- 鳥居博士顕彰会(事務局長鳥居龍次郎)「図説鳥居龍蔵伝」
- 朝日新聞社『鳥居龍蔵全集全一二巻、別巻一』
- 朝日選書、鳥居龍蔵著『中国の少数民族地帯をゆく』
- (鳴門市立鳴門中学校教諭 岩村富夫)



鳥居記念博物館(右)にある鳥居夫妻が眠るドルメン(左)

# 有終の美ならざるは 九仞にして一篲を虧く 学校法人・盡誠学園学祖

## 大久保彦三郎



私学は一人の創意と理想に基づいて創設される。したがって、まず独特の精神があつて、組織殿堂は後から追隨する。人あるところに塾と呼ばれ舎と呼ばれる学校が創られる。人材の育成について、独自の識見と高邁な理想を抱く人材が私財を投じ、情熱を傾けてこれを創設し、これに共鳴する有縁の精神的、物質的奉仕と協力を資源として、漸次に充実発展するというのが私学の自然な姿であろう。

学校法人・盡誠学園のルーツは、大久保彦三郎が明治一七年三月一日、愛媛県讃岐国三野郡財田上ノ村（現・香川県三豊郡財田町）に私塾「忠誠塾」を開設したところに始まる。

大久保彦三郎は、今を去ること一三三年前安政六年、讃岐国三野郡財田上ノ村の農家に父森治、母ソノの五男として生まれた。

三兄謙之丞は四国最初の鉄道開発（明治三二年、讃岐鉄道）に関与し、その開通式の演説に早くも本四連絡橋（瀬戸大橋）建設の必要性を唱え、かつまた高知及び徳島県との交通の重要性に着目して、私財を投じて讃岐新道の建設を実現するなどの四国開発の諸事業の端緒を拓き、四国開発一〇〇年の将来を予測する偉大な先覚者であった。この人を実兄にもつ彦三郎は彼の使命とする教育事業はもちろんのこと、兄謙之丞に劣らず県政においても私財を懸けた熱心家として教育を愛した。

学を学んだ。ここでの勉学ぶりについては、退塾後に父森治にあてられた、黒木書簡の中にその秀才ぶりをかき見ることが出来る。

この中で彼のことを「殊二御性質沈着誠実塾中御取締呉レ窓友ノ規範トモ御成被下難有仕合ニ御座候」と激賞している。

### 4 成翼館に学ぶ

兼ねて、高松中学校（現在の高松高校の前身と別）にも入学し、普通科を修業したところだが、明治一〇年五月、仁尾村（現・三豊郡仁尾町）の桑門親照の私塾成翼館に学ぶ。彼はここに一年余学びながらも徐々に京都、大阪に出て切磋琢磨したいという思いが押さえ切れなくなり、明治一一年八月「聊サカ素懐ヲ述ブ」と題する置手紙を残して郷里を出奔し、遊学の途につくことになる。

### 5 京都遊学

京都遊学の目的は三国幽眠に学ぶことであった。また、郷里出身の松岡彦二の私塾について交友を深める。この幽眠、彦二とは退塾後も師弟のつながりを持ち続け助言を受けている。

### 6 三島中洲に学ぶ

明治一二年六月、京都を後にして上京、二松学会にて生涯の師となる三島中洲に漢学を学ぶ。

彼が就いて学んだ香川甚平、黒木茂矩、桑門親照の三師は常に山田方谷の徳業を称えて

彼は県当局はもとより、広く県民に対して

も文化、特に教育立県的重要性を訴え、また郷土の産業開発、経済の振興にも兄謙之丞の素志を継いで大いに奔走した。また一般県民に対しては仁愛と思いやりの温情をもつて接し、特に地元住民の厚い信望を得ていたことが、当時の新聞その他で知ることが出来る。

さらに、その私生活をかき見ても、両親への孝養、兄弟愛、師弟愛等、彼の温厚篤実な人柄は、終生を通じ接する人を感化した。

彼の経歴については、明治三二年、時の文部大臣樺山資紀あてに書かれた、自筆の履歴書をもとに、その足跡をたどってみよう。

### 修学時代

#### 1 初学、香川甚平に漢学を学ぶ

履歴書によると、明治の初め一〇歳のころから那珂郡十郷村（現・仲多度郡仲南町十郷）香川甚平に従い漢学を修めた。

#### 2 一六歳にして小学校教員となる

香川甚平に従い修学すると同時に三野郡財田上ノ村小学校に学ぶ。明治九年三月卒業。小卒直後同校の三等授業（現・助教諭程度）として教職に就く。

#### 3 黒木茂矩に学ぶ

半年の教員生活の後、当時高松の地に開設して名を成した黒木塾の門を叩いて漢学を国



盡誠舎職員と卒業生（明治33年）

いた。方谷は漢学の才により備中松山藩の藩校の会頭学頭を務め、幕末には藩元締になり藩財政の危機を救い、陽明学を実地に生かしたことで名声を天下に馳せた人物である。しかし、このとき既に方谷は亡く、この二松学会で方谷の学統を継ぐ三島中洲と彦三郎との奇しき巡り会いとなる。

二松学会は明治一〇年、東京麹町の三島中洲の自邸内に開設された。その教育目標は、当時の世人が西洋文明に心酔し、洋風にあこがれて浅薄な生活態度に流れているのを批判し、専ら東洋古来の道徳に主眼をおき、実学の士を養成することにあつた。二松学会百年史によれば、学友安田繁四郎の回顧録の一節に、彦三郎の活躍ぶりが次のように記録されている。

「余が會にありたる時の群を抜きたる秀才は讃岐の大久保彦三郎、鹿児島の花田仲之助の両者なりと覚ゆ」

そして、明治一四年七月、彦三郎は病に冒され帰郷することとなるが、この二松学会においての師中洲と弟子彦三郎の心のつながり、彼の生涯を貫いて絶えることはなかった。

### 私塾経営

#### 1 有終学会・三餘舎

明治一六年の新年を故郷で迎えた彦三郎は、健康も徐々に回復し、私塾を開設し、幼

一課 日本政記 清史攬要

#### 第三等

#### 第二等略

第一等 三課 詩経 唐宋八大家文 荀子

二課 書経 韓非史 戦国策

一課 易経 莊士 中庸

とあり、入塾生は、一七年は三三名、一八年一九名、一九年三〇名であった。

#### 3 京都に盡誠舎を開設

この忠誠塾も明治二〇年二月、彦三郎が大志を立てて京洛の地に転じ、その塾名も盡誠舎と改称して私学雄飛の途についたため、惜しくも三年間の短命をもって閉じられた。

明治二〇年 塾を京都に移し、盡誠舎と改称

二二年 婦女講習所併設

漢・英・数学科課程のほかにも高

等中学校予備科設置

二二年 本科・別科・女子部設立

吉田夜学校開設

二三年 生徒数三〇〇名を超え、第三高

等中学校(旧制三高)在校生が

半数を占める。

二四年 本科部、予備部のほかに、尋常

中学校予備部増設

二五年 彦三郎病気のため閉舎、帰郷

#### 4 郷里に盡誠舎を移す

明治二七年 盡誠舎を琴平東四條村(現・仲



盡誠舎男子生徒正服

業、教育、衛生の公益を計る目的で有終学会・三餘舎を設立する。その名前のいわれは「凡そ物に初め有りて終りなく、有終の美成らざるは猶ほ九切にして一簣を虧くがごとし」と勉学の継続成就にあつた。

有終学会・三餘舎を作り、社会教化のための第一歩を印した彦三郎は、農村青年のために夜学校を作ることとした。三餘とは、勉学に利用すべき三つの余暇(冬・夜・雨降り)を活用して、産学の実を挙げるの趣旨で、創立は明治一六年八月であった。教則によると、聴講・習字・算数・読書・地理の各科目があった。

#### 2 忠誠塾

明治一七年三月一日、彦三郎は盡誠学園の組織的ルーツである忠誠塾を開設した。この開設に当たっては、これまでの勉学や私塾の経験・思想が生かされていることはもちろんである。設立目的は、その「趣旨」によると、国家有用の青年を作ることであり、その青年を作るための手段は儒教の漢籍学習を通じての忠誠心涵養にあつた。

その学課は、

第五等 二課 四書素読 日本立志編

一課 五経素読 西国立志編

第四等 三課 国史略 十八史略

二課 日本外史 元明史略

多度郡満濃町)に再興

明治二九年 彦三郎提案の県教育委員会設立

県会議員に選出

三二年 舎を現在地の普通寺町に移転

三四年 師範部増設

県内における大久保彦三郎の徳望もいよいよ高まり、盡誠舎の基礎もようやく固まった。明治四〇年、再び病を得て四九歳で病没した。死に至るまで燃えるような教育への抱負を抱いていたことは、その年の年始に知人に示した次の七言絶句によく表れている。

学舎経綸廿四年 半斯病軀半要全

唯思達志果何歲 元氣未消心益堅

学舎経綸すること二四年

半はこれ病軀、半は健康

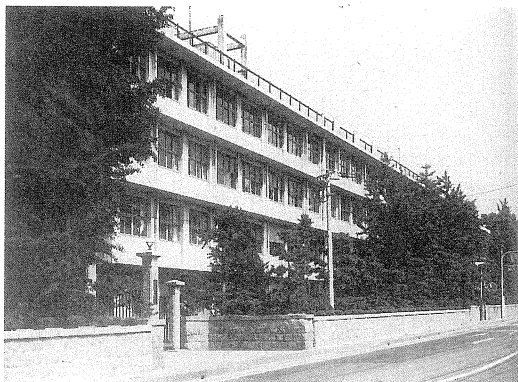
ただ思ふ志を遂すること

果たして何時のことか

元氣はまだ消えず、希望ますます堅し

盡誠舎の経営は、大久保直広新校主に引き継がれ、明治四一年新校舎増築、翌四二年諸準備を整え、四三年三月文部大臣から私立盡誠中学校の設置認可、その四月一日をもって中学校令による盡誠中学校(定員三〇〇名)が誕生した。開校式はこの月の二四日に県知事初め数百名の来賓が参列して挙行された。

(普通寺市教育委員会教育長 勝田英樹)



現在の正門

# 「誠実真面目以て万事を……」 師範学校の師父

## 山路一遊



山路一遊

### 一 師道鑽仰の碑

昭和二年一月、愛媛県師範学校に学び愛媛教育を推進する同窓生が、母校の玄関前に山路一遊の教えを刻んだ記念碑を建てた。この碑は、山路を人生の師と仰ぐ愛媛県地方視学官林伝次（のち愛媛県師範学校校長）が撰文し、「師道鑽仰之碑」と名付けられた。それは、次のような文章でつづられていた。

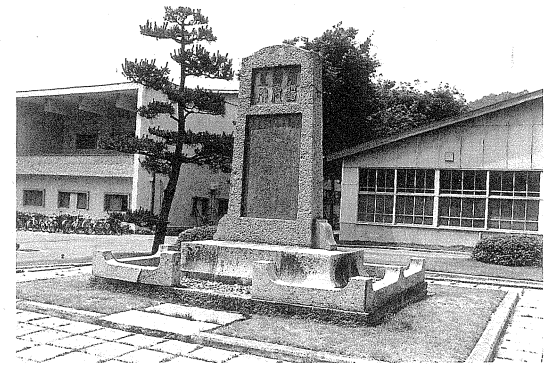
『人ノ師タル者ハ須ク嚴毅ニシテ寛仁達識ニシテ清高ナルヘシ 毫毛鄙吝陋劣(卑劣)ノ心志アルヘカラス 然シテ子弟ヲ教フルニ性ニ随ヒ材ニ応シテ各其徳器ヲ成就セシメンコトヲ要ス 是先師山路一遊先生カ躬ヲ以テ垂訓シ給ヘルトコロ我等先師ヲ鑽仰スル者宣シク斯道ヲ継紹シテ教学ノ興隆ニ努メサルヘカラス 茲ニ勅シテ以テ人ノ師タル者ノ戒トナス』

この碑は、戦後、愛媛大学教育学部構内に移された。また昭和四八年二月、愛媛県教育会が文教会館（松山市道後）建設に際し玄関前にこの「師道鑽仰之碑」を複写建立した。山路一遊の教えは、今日でも、愛媛教育を担う教師の指針とされている。

### 二 波乱の修学時代

山路一遊は、安政五年（一八五八）一〇月、松山藩の上士山路一審（藩主側役・勤定奉行）の長男として、松山城下南堀端町で生まれた。七歳にして藩校明教館に入り、五年間漢学を修業した。維新の学制改革で明教館内に洋学科が設けられると、一三歳の最年少ながら選ばれてここに入り、慶應義塾から招へいさせられた稲垣銀治・秋山恒太郎らから英語・洋算を習った。この洋学科は廃藩置県によりわずか二年で廃校となり、一遊は、勝山小学校の教師、ついで大阪に出て小学校教師となり家計を助けるが、勉学の念止まず大阪英語学校に入学した。同校で、イギリス人教師について英語・数学を学び、学業優秀につき飛び級で進級したが、禄を失った山路家の窮迫で学資が続かず中退して帰郷しなければならなかった。向学の念断ちがたくもんもんの日々を過ごしているうちに、明治一〇年二〇歳のとき、県立北予変則中学校（のち松山中学校）の司教に招かれた。

この学校は、「民権知事」として知られる愛媛県権令岩村高俊が慶應義塾から草間時福を招いて明治八年に創設した県立英学所が前身で、翌九年に中学校に発展した。草間校長は



「師道鑽仰之碑」(愛媛大学教育学部構内)

### 三 文部省出任、 各県師範学校校長歴任

東京師範学校卒業後文部省に出任した一遊は、各府県の小学校教則の調査に当たり、各県に出張して教授法を指導した。明治一九年

当時二三歳の自由民権論者であり、演説会・討論会を盛んに奨励した。教師には、慶應義塾を出たばかりの西河通徹をはじめ郷土の青年が雇用され、一遊も数学の教授を受け持ち余暇に英学の授業に出席するという約束でこれに加わった。「僕の北予変則中学校在職中は頗る愉快であった。教員は皆よく和合して仕事をし、教育の効果は見るに足るものがあった。教員の多い時で十一、二人、生徒も百二、三十人も出なかつたと思う」と一遊は後に述懐している。教場は古い明教館を使っていたが、生徒たちは自由の空気の中で、「パレール万国史」、スマイルズ『自助論』など原書で西洋の歴史と近代思想に触れ、のちに県内外の各界で活躍する人材を輩出した。明治一二年、草間校長は任満ちて松山を去り、一遊もその後を追って上京、東京師範学校中学師範学科に入学した。ここで各方面の教授法を学び、原書により教育・心理・倫理・哲学を勉強し、かたわら漢文の素養を高めた。同一七年同校を首席で卒業、卒業式には卒業生を代表して演説を行い、教育論を展開した。

には高知師範学校長を兼任して七年ぶりに松山にも立ち寄り、故郷に錦を飾った。同年、初代文部大臣森有礼による教育改革が始まる。一遊は文部省に呼び戻されてこれに取り組んだ。同二年、三二歳のとき、同郷、文部省の先輩として頼っていた内藤素行（俳人号鳴雪）の長女順と結婚した。この年、愛媛県から分離したばかりの香川県の学務課長・尋常師範学校長を拝命して同校の建設に当たり、「教育者は紳士でなければならぬから、諸君を紳士として待遇する」として自治的な校風を樹立した。同二三年には、江木千之参事官（明治・大正期の教育改革を推進、のち文部大臣）の下で、小学校令の改正に従事した。以後、一遊は、明治二五年兵庫県尋常師範学校長、同三年愛媛県尋常師範学校長、同三年埼玉県視学官、同三年福島県視学官を歴任した。同三四年には『読書法』を著述出版して、「修業の道は勉学に在り、勉学の道は読書法の宜しきを得るに在り」として、自らの修学時代洋書・漢書をむさぼり読んだ体験にかんがみ、青少年に読書をすすめる、その効能を説いた。

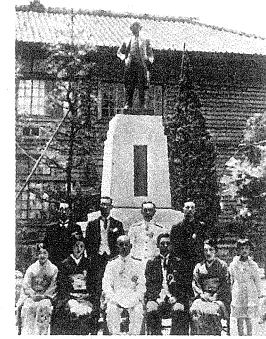
明治三五年、一遊は滋賀県師範学校長に就任した。折から同校は校舎を新築したばかりで校舎の周囲には樹木がなかった。一遊は、小さな黒松の苗木を生徒の勤労作業で校庭・周囲の至る所に植えた。「もつと立派に生長し

に「吾人は頼むべき校長を得たり」と大書した。

師範学校は「人間を作る高尚な仕事に携わる人間教育の堅固な学校であらねばならない」とする一遊は、教員に人材を物色し、全力投球を要望した。そのため、自ら率先して教授法の改善を研究発表し、生徒には日記を書くことを義務づけ、自ら閲読して個人的に懇談指導するなど、その人間育成に身をもって当った。

卒業していく者には、「小学校教育は人の為にし国の為にするものであるから、「誠実真面目以て万事を一貫すべし、公明正大にして明暗表裏あるべからず、周到にして粗略なるべからず、敏捷にして無精なるべからず」と教師の心得を諭した。

一遊は、附属小学校にもよく足を運び、生徒の教育実習の様子を見回ったが、この市内の附属小学校だけでは県下の農・山・漁村の数多い学校の教育のモデルにはなりにくい、もつと地方と結びついた小学校を代用の附属校にしたいと考えた。そこで、大正九年、模範村として全国に知られた温泉郡余土村の小学校を代用附属小学校に指定、農業を中心とした勤労教育を行い、自治活動や公民教育、郷土教育にも力を注いだ。



山路一遊の銅像と遺族（滋賀県師範学校構内）

た色々な庭木を植えれば手間がかからないのに」と生徒たちは思った。ところが、松苗は年とともに成長して見事な美観をなす庭園を形成した。「一個の松の種子、境地によりて矮松ともなれば棟梁の材ともなる、人は教師が栽培すれば自ら境遇を選びて発展する」との教えを生徒に体得させる、百年の大計を考へての山路式の植林であった。

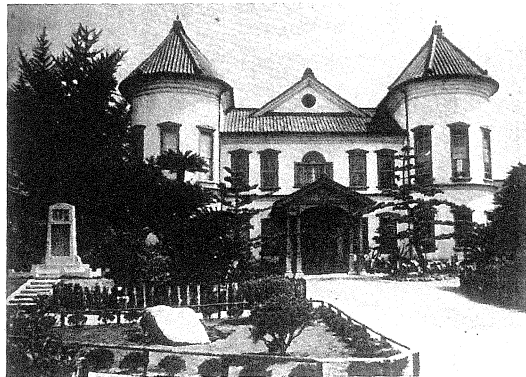
一遊はここで一〇年間校長として在職した。その豪放な人格と高まいた教育理念は教員にひとしく敬慕された。一遊没後、滋賀県師範学校同窓会は、同校々庭に銅像（昭和九年建立）を建て、「恩師山路一遊先生（同一六年刊）」を出版して、その遺徳を追憶した。

#### 四 愛媛県師範学校長として

大正二年、山路一遊は望まれて愛媛県師範学校長として郷里松山に帰った。一遊すでに五六歳であったが、背骨を伸ばして闊歩する威厳に満ちた風ぼうは滋賀時代と変わらなかつた。新任式での一遊の第一声は、「学校はすべて生徒のものなり。教師も其の他すべて生徒あつてのものなり。諸君は堂々と闊歩せよ……」というのであつた。新校長の呼びかけに感動した生徒の一人は、食堂前の掲示黒板

一遊は、大正時代を風びしたデモクラシーの思潮には「浮説に迷ふ勿れ」と批判的であつた。しかし、大正デモクラシーの影響で教育界に勃興した自由教育運動には、大正一〇年第一回愛媛教育研究大会での開会の辞に、「自由教育は或る点に於ては欠点もあらうが、此の際教師が大いに働いて、方法の如何によつては偉大なる効果を修め得らるるものである」といふことを世に知らせたいものである」と述べるなど、理解を示した。

一遊は、生徒や同窓生から「師父」と仰がれたが、自己の教育方針に妥協を許さない硬骨ぶりを非難する者もおり、大正一一年一月県会で辞職を求めた声があがった。師範学校の教師・卒業生・生徒たちは集会を開いて「吾々、山路一遊校長を絶対に信任するものなり」との決議文を発表した。この強い擁護運動に山路更迭の声は鎮静したが、翌大正一二年、一遊は「老齡劇務に堪へず」と六六歳をもつて愛媛県師範学校長を勇退した。以後、一遊は、「断じて学校の姑たらず」と宣言して教育に口出しせず、花と野菜を無二の友として「無何有の郷（無為の仙境）」の晩年を過ごし、昭和七年八月、七五歳で生涯を終えた。



愛媛県師範学校（「師道鎮仰之碑」建立のころ）

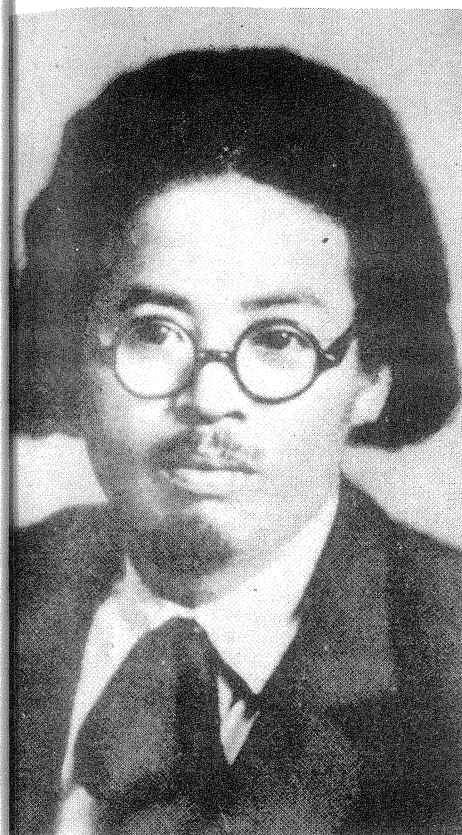
○大野静・武内好将編「天放集—山路一遊先生遺稿」（昭和五一年、青葉図書）

（愛媛県立松山南高等学校教頭 高須賀康生）



# 自由と独創の人 生活綴方の始祖

## 小砂丘忠義



生活綴方の始祖と仰がれ、日本の民間教育史上に不滅の業績を残した小砂丘忠義の顕彰碑が、昭和二八年一月に高知市城山の墓地に建立された。

一八九七年四月二十五日大杉村に生れ初の教育界に在り自由教育を鼓吹し後上京して綴方教育に献身し一九三七年十月十日東京に於て生涯を終る。君は嘗て高き独創の人であった。また独創の人としてより前に偉大にして完全な自由人であった。「生活綴方」は自由と独創の両親から生れた。だから最高の価値と永遠の生命がある。君の魂はそれにとり續く者として励まされ

限りなく発展し、  
一九五三年一月  
と刻字されている。  
池田邦夫撰書

小砂丘（本名・笹岡）忠義は、明治三〇年四月、高知県長岡郡東本山村（現大豊町）で生まれた。

父（楠蔵）は森林を切り倒し、苗木を植える植林人夫であった。住居を転々とし、父も母（芳）も身を粉にして働いた。長男の彼は木の実や山菜を採っては、おかずを作り、弟妹に食べさせた。

明治四五年、本山小学校高等科三年へ入学し、往復二四kmの道を寒風にさらされ、ちようちんをつけて通学したという。

このように幼いころから貧困に耐え、生きる力を身体を通して学び、反骨と強じんな人間性を培っていった。

木を切り倒すと匂ってくる木の香りが好きで、木こりになろうかと思ったが成績がずば抜けてよかったので、教師の強い勧めで高知師範学校を受験した。

大正二年、師範学校へ入学したが、師範学校における教育にはなじめなかった。後年彼の生涯の仕事となる綴方―作文―の授業よりは、むしろルソー、ニイチェ、独歩、藤村などを読み、自分自身の道を切り開いていった。



文集「山の唄」の作成風景 1919年(大杉校)右端手前が小砂丘忠義

### まず綴方から

大正六年、師範学校を卒業して、大杉尋常高等小学校へ赴任した。

「綴方は学校の中ばかりでやっていられるものではない。綴方については、まずその人その人の生活している一個体としての自覚が緊要である。修身も歴史も理科もすべて綴方までの道程にすぎない。まず綴方から」と彼は主張している。

綴方によってヒューマニズムの教育を全面的に試みた。最初の文集は「山の唄」であった。その後大正一〇年に同人誌として、中島菊夫（後、代表作に漫画「日の丸旗の助」）、吉良信之（後「ダブルトンプランの進歩とその適用」を翻訳出版）と一緒に「極北」を発刊した。

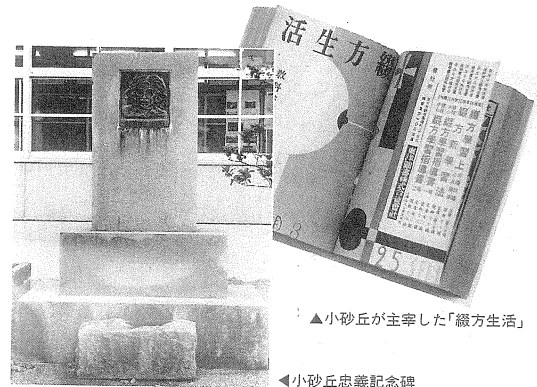
「我々は生徒のために生きている。彼等の生涯を通じて我々の責任は大きい。古来のしきたりを放りすて、新しき自己の意識に生きることだ。道をふさぐ者をまたいで通るか、退いてもらうか、つきぬけて通るか、一緒にへばり込んでしまうかは自由である。なろうことなら人々と一緒に前へ進んでほしい」と述べている。教育革命論、視学論などを書き、当時の教育の在り方を批判した。この新しい考え方に心から共鳴する者は極めて少なく、

多くの教師は敬遠するばかりであった。しかし、彼は終始、子どもを愛し、生活のなかから生まれてくる綴方に感動して評を書きつづけた。

あるとき、徹夜して文集を作ったので、自分遅刻したことがあった。このとき校長が出勤簿へ遅刻の判を押したのに対して、「僕は子どもの教育のために、文集作りを徹夜でやり、そのためやむを得ず遅刻したのである」と自分なりの正当性を強く主張して訂正を求めたという話も伝わっている。

大正一三年に「極北」が廃刊させられると、その翌年には「地軸」を発刊した。彼の同人誌や自由解放的な教育方法は、その当時の教育行政に携わる者からうとんじられた。

その後、長岡郡田井小学校長に任ぜられたが、彼は、ここでも子どもをみつめる教育に専念した。それまで廊下の壁に掛けてあった楠公父子の列れや新田義貞の絵などを子どもの絵に掛けかえてしまったという。当時の体制の下で自分の所信を貫くことは、よほどの信念と気骨がなければできないことであった。大正一四年一月、田井小学校長を最後として、相いれぬ教員生活に終止符をうち、万感の思いで上京する。土佐の教育に身魂を賭けてきた彼の心中はいかばかりであったろう。彼の高知県下での教員生活は八年八月まであり、その間に勤務校を七つも変わっている。



▲小砂丘が主宰した「綴方生活」

◀小砂丘忠義記念碑

## 「綴方生活」の発刊

上京後は東京児童の村小学校へ落ちついた。この学校は自由を標ぼうしていた。彼は教壇には立たず、「教育の世紀」の編集に当たった。つづいて文園社で「鑑賞文選」(後の綴方読本)の編集をし、昭和四年に野村芳兵衛、上田庄三郎、峯地光重、小林かねよ等と念願の「綴方生活」を発刊した。

「綴方生活」は綴方教育の現状にあきたらずして生まれた。綴方教育の一分野のみではない。現状教育の分野に於て満たされぬ多くのものを見出すが故に、微力を顧みず敢えて出発する。「綴方生活」は新興の精神に基き常に清新潑刺たる理性と情熱とを以て斯界の革新を図る(創刊号)。

それまでであった「赤い鳥」の文芸的な綴方をのりこえ、生活に密着した子どもたちの姿を大切にしながら、既成文化の伝達を主とする教育に対して、現実の町や村にくらす子ども自身が生み出す野生の文化の創造を重視した。つまり、生活の事実を大切にしながら教育方法であった。

「綴方生活」を中心とする生活教育運動は燎原の火のごとく広がった。九州から北海道までの教師たちの熱い共感をよび、その賛同者

## 二つの記念碑が建つ

昭和二七年、小砂丘忠義の偉業を伝承し発展させるため、福田義郎(当時高知新聞社長)、横川正郎(当時宇佐小学校長)らを中心にして、小砂丘賞委員会を組織した。翌年から、作文教育の実践に励んだ個人と団体に小砂丘賞を贈っており、平成三年で三九回を迎える。

また、昭和三〇年に「こども小砂丘賞」を設け、現在に至っている。更に高知市民図書館の協力で「小砂丘賞作品集」を発行し、高知県下の作文教育に大きく寄与している。

また、出身地の大豊町では本年度予算を組み、小砂丘忠義先生顕彰会を発足させ、小砂丘忠義記念館の完成を急いでいる(記念碑は昭和二八年に大豊町にも建立されている)。

先覚者たるがゆえに、ふるさに受け入れられなかった彼の記念碑がそのふるさに二つも建っていることに深い感慨を覚える。やはり彼は偉大な先覚者であった。彼が教育界にまいた一粒の麦は多くの仲間にはささえられ、全国のみならず成長している。軍国主義の胎動する時代にあつて、底知れぬ洞察力と不屈の精神で、画一的な教育に敢然として向かい、子どもとともに生きぬいた彼の業績は不滅である。

### 【参考資料】

『生活綴方の伝統』『生活綴方事典』  
『小砂丘忠義と生活綴方』

(財団法人小砂丘賞委員会常務理事 毛利俊男)

## あふるなふり

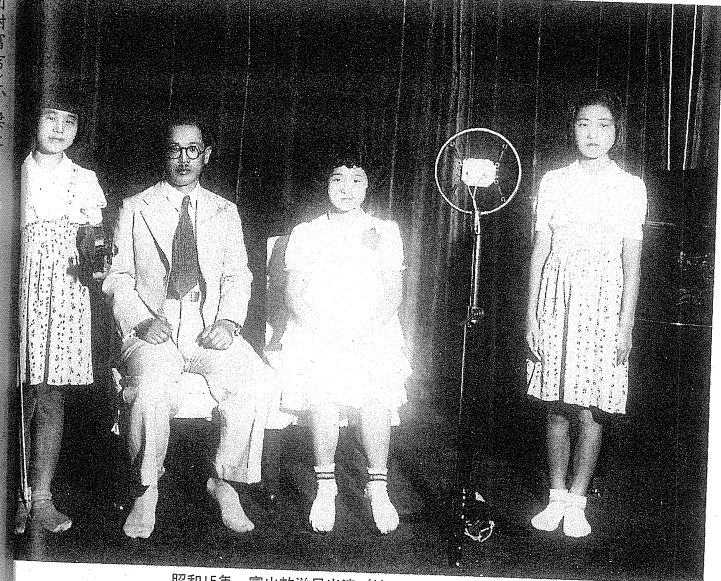
昭和六年八月、彼は七年ぶりに綴方の講習で土佐の土を踏んだ。甲板から見る浦戸湾の朝の光はまぶしかった。母、妹、叔父が両手を大きく振っているのが見えた。木も草もいきいきとし、起伏する山並みに安らぎと懐旧の情が湧き、言葉も出なかった。梁山俱樂部の仲間にもまれて、酒をのみ、土佐の善拳をうち、よさこい節を歌った。

しかし、彼は肝硬変並びに腎不全のため、昭和一二年一〇月一〇日、東京において四一歳の若さでその生涯を終えた。同じ高知の先輩である上田庄三郎は「彼は綴方さえ読んでおれば夜の明けるのも日の出るのも知らなかった。どんな文士よりもはるかに芸術的な境地であつたにちがいない。彼は独特の小砂丘精神を開拓した」と語っている。



現在の大杉小学校

# あかりをつけましょぼんぼりに 童謡一路 作曲家 河村光陽



昭和15年 富山放送局出演(娘3人と)

あかりをつけましょぼんぼりに  
おはなをあげましょもものはが  
「うれしいひなまつり」  
かめめの水兵さん ならんが水兵さん  
白い帽子白いシマツ白い靴  
波にチアブチアブ浮かんて  
「かもめの水兵さん」  
なわいしこみちほどこのみち  
いふとどりのみちちゃんど  
ランドセルいっしょ元氣よく  
「なかよしこみち」

だれでもいつでもついロザさんでしようこ  
れらの童謡は、昭和の初めから、戦後にかけ  
て多くの童謡を作曲した河村光陽の作品です。  
彼の童謡の代表作にはほかに、「赤い帽子白  
い帽子」「グッドバイ」「船頭さん」「りんごのひ  
とりごと」「早起き時計」などがあります。  
現在のようにテレビなどの映像文化のなか  
った時代、子供たちの多くは、ラジオから流  
れてくるこれらの歌を耳をすませて聞き入っ  
ていたことでしょう。

## 父の死を乗り越えて

河村光陽は、明治三〇年八月二三日、あまの上野  
音楽家になりたいたいという夢が捨て切れな  
った彼は、とうとう二年後依願退職したので  
した。彼は、まもなく故郷を後にただ一人、  
朝鮮に渡り咸境南道の公立師範学校に奉職し  
たのです。彼は、附属の女学校、小学校でも  
教鞭を執り、校内では貴重な存在でした。し  
かし、彼は自らの意志で朝鮮で最北端の学校  
に転動したのです。その学校は、川を隔てて  
対岸にはロシアの町が望める場所でした。

ここを選んだのは、心ひそかにモスクワに行  
って国民音楽学派の作曲家に作曲を教わらう  
可能ならば欧州までも行き、勉強するのだと  
いう永年の考えを具体化するためだったのだ  
でした。そのとき、光陽は弱冠一九歳でした。  
ところが、現実には厳しかったのです。ロシ  
ア革命とその後の日本のシベリア出兵で、念  
願のモスクワ行きを断念せざるを得なくなっ  
たのです。しかし、ここであきらめる光陽  
ではなかったのです。

## 東京音楽学校へ

母の願いで四年ぶりに故郷に帰った光陽は、  
遠縁に当たる岡部都根美と見合いし結婚しま  
した。そして、新婚二か月目の大正一四年、  
向学心に燃える光陽は、東京音楽学校選科ピ  
アノ科に入学しました。以来在学中の二年間、  
中田章等の有名な音楽家に個人指導を受け本  
格的な音楽の基礎の修得に努めたのです。



大正10年 ヴァイオリンを持って

母の勧めもあって小倉師範学校に進学しま  
したが、必ずしも彼の意を満足させるもので  
はなかったようです。師範学校での彼の不満  
を紛らわしてくれたものは音楽だったのです。  
家の隣が神社で、お神楽の音を予守歌がわり  
に聞いていた彼は、生まれつきの器用さで、  
幼いころから好んで尺八を吹いていたことも  
あって、オルガン、バイオリンを得意とし、  
時には先生の代行も務めたということでした。

## 夢を叶えに朝鮮へ

卒業後、福岡県田川郡金田尋常高等小学校  
に赴任しました。彼の勤務ぶりは、先輩、同  
僚も等しく認めるところだったのですが、彼  
自身は人知れず悩んでいたのです。つまり、  
将来の生活の安定を考えて師範学校を選び、  
小学校に就職したものの、音楽家としての道  
を歩みたいという願望はこのままでは果たさ  
れそうもなかったからです。

長女順子が生まれて三か月後に佐藤義美の勧めで初めて「うれしさ」に附曲しました。順子は後に声楽家として名を成し、父光陽の作曲した幾多の童謡をレコードに吹き込んでいます。人の子の親として、子どもの誕生ほど喜ばしいものはありませんが、彼は師範学校卒業という経歴も併せて、童謡への関心を高めていったのです。

### 努力の人

芸術家にとって、天性の素質が大切なのは言うまでもありませんが、それと同時にたゆまない努力と精進なしにはその道で大成することは不可能といえます。彼の没後家族の手元には、数十冊のスクラップ・ブックが残されました。そこには当時の新聞からの切り抜き、世界の音楽情報、彼の関係していた催しものプログラム、指揮をした往年の放送番組表などが克明に整理されています。これらのスクラップ・ブックは、彼が努力の人であったことを証明すると同時に、当時の児童音楽を中心にした我が国の児童文化の推移の一面をうかがうことのできる得がたい資料ともなっているのです。

昭和三年一月、明治大学童謡研究会主催の「童謡と童謡・踊りの会」に彼自身の率いるクワイア少女合唱会(後の子鳩会)とともに



昭和3年 ピアノの前で



涯における歌知れぬ実演の記念すべき第一回だったのです。

昭和四年二月、ラジオ放送や舞台での実演の限界に気付いた彼は、曲集を作り、形に残す必要性を強く感じ、少女小曲創作集「真珠と小鳥」を出版しました。これは、生涯に二十数冊にものぼった作品集の処女出版版だったのです。

### 再び教壇に

昭和四年三月、第三子の誕生を迎えようとしていた彼は、将来の生活設計も考え、五年ぶりに教職に就くことにしました。新設されたばかりの小石川区立竹早小学校の教壇に立った彼は、いよいよ児童への愛情が深まっていきました。当時の子供たちの歌が、歌詞も曲も西洋風であるのを心配し、日本の子供たちにふさわしい、良い歌を与えたいという願望が一層強くなっていったのです。そのころの光陽は、教鞭を取る傍ら寸暇を惜しんでピアノに向かい、一日五〜六時間も練習に励む一方、私淑していた藤井清水先生に師事して、作曲の勉強にも心身ともに打ち込んでいたのです。

以後の彼の活躍の一部を年譜で紹介いたします。

昭和五年九月二八日 N.H.K放送初出演「子供の時間」に作曲 指導 ピアノ伴奏で出演

昭和六年五月二四日 「ポツポの会」(日本童謡社主催)童謡、小曲等の作曲並びにピアノ伴奏

昭和七年一月二日 「朝日子どもの会」出演

昭和八年三月三日 「童謡作曲の仕方」出版

昭和八年九月九日 「河村直則童謡曲集」出版

昭和八年九月 「かもめの水兵さん」作曲着手

昭和九年一月三日 皇太子御誕生奉祝音楽会 出演

昭和一〇年五月 「河村童謡第二曲集」出版

昭和一〇年十一月二七日 「アンデルセン童謡百年祭」出演

願退職

昭和二年七月三二日 小石川区立竹早小学校を依

願退職

昭和二年九月 「まんまるお月さん」発売

昭和二年五月 「かもめの水兵さん」発売

昭和二年八月 「河村童謡第三曲集」出版

以来、昭和一七年までに一二集まで出版され、童謡作曲家、河村光陽の名は、日本中に

広く知れ渡ることとなったのです。

### 童謡一路

太平洋戦争が終わって、すきんだ人々の心



記念碑

に明るさを取り戻してくれたのは、やはりあの懐かしい「赤い帽子」「白い帽子」「アッドパイ」「船頭さん」「りんごのひとりごと」「早起き時計」「うれしいひなまつり」「かもめの水兵さん」などの彼の童謡でした。光陽は今こそ歌を通じて人々の心を和ませるべきだと使命感に似たものを感じました。

彼は新たな希望に燃えて数々のプランを企画していましたが、昭和二年一月二三日、突然吐血し、翌朝午前五時、帰らぬ人となったのです。享年五〇歳でした。

光陽の作品は、彼が亡くなって四〇年以上たった今も歌われています。今後もずっと歌いつがれていくことでしょう。彼の偉業をたたえる記念碑は各地に建てられました。彼の故郷の上野にある記念碑には、「童謡一路」の文字が刻まれています。

(福岡県教育委員会義務教育課指導主事 中村 裕)

参考資料 「福岡県小学校用道徳教育用郷土資料」

福岡県教育委員会

「河村光陽名曲集」音楽之友社

\*

『堂々と地を踏みしめて歩け』  
青少年の心に生きて下村湖人  
(下村虎六郎)

## 『次郎物語』と湖人

下村湖人は、『次郎物語』を昭和十一年(五二歳)から書き続け、昭和二十八年に完結している。

序文に、湖人はこう記している。

「前半では、次郎の生い立ちを描きつつ、実は主として『教育と母性愛』の問題を取り扱った。教育は、愛がないと成り立たない。親は、まず子供を温かい愛情で抱いてやらなければならぬ。しつけや理知的な教育は愛の上になり立つものだ。彼の生活の大部分は、世の親達にそうした問題を考えてもらいたいための材料として描いたものである。だが、後半においては、次郎はもつと独立性をもつた存在になっている。彼は徐々に彼自身の内部に眼を向けはじめ、そこに、周囲から与えられる幸福以上の何ものかを、探し求めようとする。しだいに、理性的、意志的、道義的になっていく『自己開拓者としての少年次郎』を描いた。」

それが、後の湖人の生き方の大きな特徴となり、多くの若者たちに深い影響を与えた思想や人生観の基本となった。

一方、詩歌を語る何人かの友人とともに、湖人は内田夕闇の筆名で詩作に励んだ。

明治三六年、熊本第五高等学校に入學。多彩な才能の開花と友情に恵まれた生活であったが、湖人の生涯を左右した畏友田沢義輔(佐賀県鹿島市出身。後の貴族院議員、青年団指導者)との出会いもあった。湖人は田沢の人間の大きさに傾倒していたが、田沢もまた、湖人の内面の深さ、志操の高さ、ものの真実を突きとめずにはおかない哲人的風格を心から尊敬していた。

明治三九年、東京帝国大学英文科に入學。湖人は、『帝國文学』の編集委員となり、作品の発表と同時に、活発な評論活動を展開した。明治四二年、卒業。

## 教師時代

## 佐賀中学校のころ

湖人が請われて母校佐賀中学校の教壇に英語教師として立ったのは、明治四四年、二七歳の時であった。

湖人は、教師として思う存分の活躍をした。生徒の先頭に立って、何事にも真剣に取り組んだ。やせきす中で中背の彼は、目つきが鋭く、

湖人は、『次郎物語』の各場面をおおして自己の教育に関する理念を示している。

湖人は、「白鳥入芦花」という言葉を好んだ。この言葉の意味を『次郎物語』の朝倉先生に次のように言わせている。

「まっ白な鳥が、まっ白な芦原のなかに舞い込む。すると、そのすがたが見えなくなる。しかし、その羽風のために、いまだ眠っていた芦原が一面にそよぎだす、というのだ。お互いにこの白鳥の真似がしたいものだね。」

つまり、表面には出ないが、まわりの人たちに確実によい影響を与えていくということであり、それには、相応の自己の研鑽と実践が要求されることになるが、これが湖人の学校教育や社会教育の場で、終生持ち続けた姿勢であった。

## 生い立ち

下村湖人は、明治一七年(一八八四)一月三日に、佐賀県神埼郡千歳村(現在の千代田町)で生まれた。

小学生時代の湖人は、家の没落、母の死、兄と弟への祖母の偏愛などで肉親の愛情に十分恵まれて育つたとはいえない。持ち前の負けん気で、不遇な環境に耐えてはいたが、幼い心の中に、すでに孤独の味を噛みしめるこ



下村湖人生家 佐賀県神埼郡千代田町崎村

らの誘いを受けて加入した。このグループで、人生、社会、思想の問題を熱心に語り合い、その中から、人としていかに生き、何をなすべきかについて、ひとつの生き方を学んでいる。

生徒を叱るときも、本気で激しく叱った。常に精進を求めた。

また、英語教師のために県立図書館長を呼んでフランス語を教えてもらったり、國漢の先生たちとお寺に心経の講義を聞きにいったり、自分では、佐賀連隊の将校たちに英語を教えたり、社会教育関係の講演に出かけたりした。

校友会誌『栄城』創立四〇周年記念号（大正五年二月発行）に「知恵と呑気と努力」と題して次のように記している。

「生死の境に明鏡の如く利剣の如く光れる一瞬、将来に瞬刻の時間もないと自覚する一瞬、我々は必ずや氷山の如く静かに、猛火の如く荒れ狂ふ狂嵐なる心靈の姿を見るであろう。この境地、然り、この一瞬の境地を死に臨む五〇年前から刻々に我等の胸裏に見出すことが出来たならば、我々の人格は如何に躍動し、如何に輝くであろう。（後略）」

湖人の教師としての覇気が満ちあふれていたことがうかがえる。

若い教師や生徒たちに対して、こう言つて忠告していた。

「堂々と地を踏みしめて歩け」

しかし、湖人は、生徒に厳しさを求めるだけではなかった。

自宅にはいつも数人の生徒を預かっていた。その多くは保護者もあまじく頼んだ子弟だった。湖人は一人ひとりゆきどどいた面倒を

聞いていた生徒たちは、湖人が壇を下りてもしばらくは茫然としていた。

それ以来、湖人は、唐津中学の黄金時代といわれる三年間を、信望を一身に集めつつ作りあげたのである。

唐津中学の校友会誌『鶴聲』三号（大正一三年二月発行）に、「自己表現と奉仕」と題し、約八〇〇字に及ぶ論文を書いて、苦しみを通して自己を深めることの意義を説いている。

「苦難は完成への道である。苦難と戦ひつつ喜悅に満ちて人生の道程を歩むところ、そこに我々は正しき自己表現の意義を見出す。それは同時に至純至高なる普遍への奉仕そのものである」

「自己表現と奉仕との融合一致、これ即ち人間の永遠にして亡びざる真実道である」

湖人は、校歌を作詞した。これは、会心の作であった。

#### 唐津中学校校歌

宇宙の御生命大日輪の

湖に競ひて昇るを見つ

息づく我等は光の海の

光の男の子 光 光の男の子

（第二節以下略）

この校歌の各節は、それぞれ「光」「力」「望」で結ばれているが、その意は、

みた。これは後に校長になってからも続けた。生涯、青少年が湖人のまわりにつきまとい、教師をやめたあとの著述生活でも若者が対象であったし、それが湖人の一生を貫いた仕事であった。



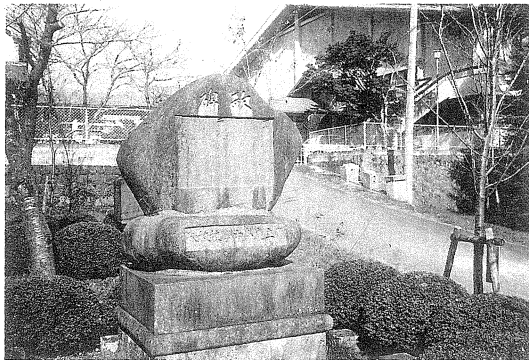
佐賀中学校校舎 下村湖人は、ここで学び、後に教師として奉職した

#### 鹿島中学校の青年校長

大正九年三六歳のとき、鹿島中学校（佐賀県鹿島市）の校長を命じられた。

前校長の厳格さとはうって変わって、生徒の意見を聞いたり、自分で校歌を作つて発表

「光とは理想へのあこがれと自己純粋化の姿であり、力とは働きを表現する無上のシンボルであり、望とは将来への躍進」であり、これは、湖人の生徒への思いの凝縮であった。



現在の鹿島高等学校（旧制鹿島中学校）の校門のそばにある校歌の歌碑。下村湖人が校長のときに作詞した校歌が刻んである。

下村校長が台湾に転任するとき、教職員も生徒たちも、町の人々も泣きながら列を惜しんだ。

「我等は校長の残された校歌と、最後の御教訓「真の偉人は真に謙遜する人なり」と言ふ

会では生徒と一緒に歌つたりして、全校に自由闊達な雰囲気のみならず「進歩的青年校長」としての信頼を高めていった。

湖人は、学校の植林をしたり、社会教育方面にも招かれれば講演をしたりした。

校長宅にはいつも数人の手に負えない生徒たちを預かり、それぞれの生徒に応じた教育を施して立ち直らせていった。「人間にクズはいない」というのが湖人の信念であった。五高時代からの友の田沢義輔と会い、夜を徹して社会情勢を論じ、将来の抱負を語り合い、終生協力することを約束して固い握手をかわしたのもそのころである。

唐津中学校（佐賀県唐津市）の校長として赴任することになったとき、鹿島中学の生徒たちは、留任運動を起こそうとしたり、下村校長を慕って唐津中学に転校を申し出る者まで出た。

#### 唐津中学校の黄金時代

湖人は、唐津中学校に、大正七年から九年まで教頭として、大正一二年から一四年まで校長として勤めている。

下村校長を迎えた日の生徒たちの雰囲気はストライキの余波が残ったりして、必ずしも穏やかでなかった。しかし、湖人は、よく透る声で静かに就任のあいさつを述べた。二時間にわたる演説をまるで氣を萎められたよう、事をせめてもの御形見として将来に進まう」と「鶴聲」にある。

#### 台湾中学・高等学校を最後に教職を去る

大正一四年（一九二五）六月、湖人は、台湾第一中学校長として赴任。昭和四年二月、台北高等学校教頭に転任。九月同学校長となる。昭和六年、台北高等学校校長を退任。

このときをもって、前後二〇年にわたる湖人の教師時代が終わったのである。

#### 社会教育への道

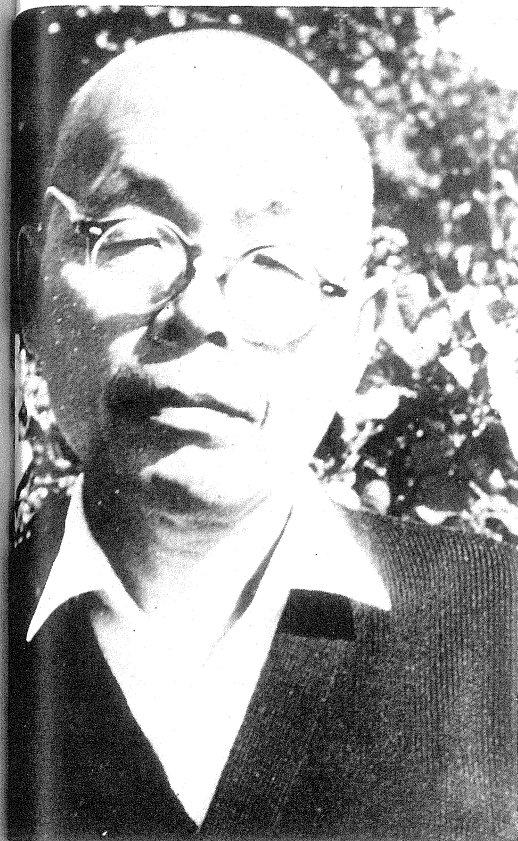
台湾から上京した湖人は、田沢義輔に協力して社会教育に携わった。青年団、壮年団の指導者として全国を遊説した。昭和二〇年、夫人菊千代が亡くなり、湖人は余生を、いよいよ仕事一本に捧げる覚悟をし、「次郎物語」の完成に全力を注いだ。だが、体が弱つていき、昭和三〇年四月二〇日、「菊千代」と亡妻の名をつぶやくように口にして、眠るように逝った。その死に顔には、生涯を学校教育、社会教育に捧げて生き抜いた人物の美しい安らぎがあった。

#### 参考文献

- 下村湖人伝 永杉喜輔著 柏樹社
- 郷土史にかがやく人びと 田中州太郎著 佐賀県青少年育成委員会
- 佐賀県教育委員会教育長 志岐常文

のんき・いんき・げんき  
精神薄弱教育の先覚者

近藤益雄



で「だれにしろれることもなく」自ら命を絶ち、子どもとともに生きた五七年の生涯を閉じた。精神薄弱教育不毛のときにあつて、孤峰のようにそびえていた近藤の死は、まことにパイオニアの宿命を思わせる。

近藤は東京の大学に在学中、スラム街の託児所の手伝いをしたことがきっかけで教育の道に入り、戦前は、離島へき地の貧しい子どもたちに綴り方による生活教育を行い、戦後は、精神薄弱児の教育に携わった。特に戦後の十数年は、長崎県北松浦郡佐々町に任意施設「のぎく寮」、さらに「なすな寮」を設立して、文字どおり二四時間精神薄弱児と起居をともにして苦心さんたん、遂に力尽き、道なばにして倒れたのである。

二つの出会い

近藤は明治四〇年佐世保に生まれ、七歳のとき父を失い、母と二人で郷里平戸に移住。大正一三年、中学猶興館から国学院大学高等師範部へ進む。在学中、ふとした機縁から菓嶋の桜楓会（日本女子大学の同窓会）菓嶋託児所で奉仕活動に従事した。このことが、その後の彼の歩みを方向づけた。

彼はそこで昼間は子どもたちと砂遊びをしたり画を描いたりし、夜は勤労青年たちに國



語を教えた。すべて無報酬であつたが、この奉仕の仕事が楽しくて学業はうち捨てて没頭した。託児所におけるこの体験が彼を人間愛に目覚めさせ、社会に目を開かせた。そして、学友たちがほとんど都会の中学教師を希望するなかで、彼は草深い田舎の小学校で、恵まれない子どもと一生をともにしたいと願うようになる。

彼はまた、学生時代に生涯の宝と出会った。大学在学中、村野二郎、川路柳虹などの知遇を得て詩を発表するが、その美しい叙情と格

ひとりのおとば  
われは／ひとりの／おとばとなりた  
し／つちに／たり／つちに／くつ／つを／  
みずひと／なま／ひとりの／われは／  
なりた

おとばは、  
んてい／く／つ／つのは／く／つ／  
ものは／の／り／だれに／し／れ／  
しなく／な／の／わ／な／

まるで辞世の詩を思わせるが、近藤益雄は昭和三九年五月、妻子らが施設の子どもたちを引きつれて農園に出かけたあと、寮の自室

調の高さは高く評価された。かたわら、萩原井泉水に師事して口語自由律の俳句を学んだ。そんな学生詩人にひそかにあこがれを寄せた文学少女がいた。平戸高等女学校の柴山えい子である。詩を通じて二人の交際が始まった。えい子の卒業を待ちかねたように地元青年との縁談が持ちあがつたが、えい子はそれをふりきって近藤のもとに走った。「秋雨に芙蓉の花がぬれていて、きれいな虹が空にかかっていた時、私はゆかたの着物に赤い帯を締めて下駄はきで白いレースの傘をさして花嫁になりました」。学生結婚である。

以来、えい子は近藤のよき理解者として苦楽をともにすること三八年。その間、三男四女の育児、乏しい家計のやりくり、そして、世渡りのへたな近藤に代わって「のぎく寮」の経営と、縦横の活躍をして夫を支えた。そんな妻を彼は「どんな嵐の中に立つても、望みをいだいて喜ぶ人間」と評価して終生深い愛を傾けた。彼女は文筆の才にも恵まれ、「厨にありて」「きえた子供会」等は世評も高く、昭和四三年、吉川英治賞を受けた。

1939.5.5

大学生のころから、弱い子や貧しい者への想いをつのらせていた近藤は、卒業すると何のためらいもなく郷里に帰って小学校の代用

教員になった。小学校教諭として一五年、彼が歩いた学校は、いずれも磯の香と土のにおいのする辺地、離島ばかりである。彼はそこで、今井誉次郎や小砂五忠義らの教えを受けて生活綴り方の実践に取り組み、丹念に実践記録を取り続けた。後年「わたしの教育者としての本性は、この生活綴り方によって作られた」と述懐しているように、「ひとり残らず、書ける子どもにしてやるう」と願い、西海の、そしてその果ての、ランブのもとで暮らす子どもたちに、綴り方を通じての生活教育に全身を燃焼させた。

折から、戦時体制が強化されていく中で、生活綴り方運動に対する弾圧は露骨になり、彼の家にも特高（政治・思想担当の警察官）がしきりに出入りするようになる。綴り方はやるな」との忠告や圧力にもかかわらず文集を出し続け、国語教育史に残る日本一の文集「勉強兵隊」などを発表した。「書かせることで子どもの中に入り、入ることでよって子どもの生活も伸びる」ことを願った彼は、書かないではいられなかったのである。

### のぎくとなずな

昭和二三年、四一歳で北松浦郡田平小学校の校長となった。栄転である。しかし、そこで彼の目にとまったのは、健康児の後からつ



いていく知恵遅れの子どもの姿であった。校長室を開放してその子らの観察指導をしているうちに、通常の学級に置いたままではとても救えないと悟った彼は、早速特殊学級作りにも動き回った。そして、口石小学校に特殊学級設置が認められたとき、彼は自ら願ひ出てその担任になった。

わずか二年で校長のいすを捨ててヒラの特殊学級の担任へ——世間は好奇の目を向け、新聞も大きく取り上げた。しかし、近藤にとっては、校長職をなげうつことは「深刻なこ

どもでも悲痛なことでもない、極めて当たり前なこと」であり、「教師の一人としてやらねばならぬことをやる」までのことだった。長年にわたる辺地での生活綴り方教育によって、だれでも人間として人間らしく生きていけるという確かな経験を持つ彼が、今度は、世間からしいたげられている知恵遅れの子どもの人間らしさの回復とその自立に立ち向かっただけのことであって、彼にとっては当然の教育の発展であったわけである。

当時、精神薄弱児を教育することについてはまだ認識も薄く、特殊学級も皆無に近かった。伝え聞いて県外からも入級の希望が相次いだ。彼らを下宿させる家とてない。それに、三〇人にも及ぶ子どもたちと起居をともにし、さらに徹底した二四時間の生活教育を行おうとすれば、彼らを收容する施設がどうしても必要になる。近藤は、なげなしの財布をはたいて、放置されていた旧農学校の校舎を払い下げてもらい、昭和二八年、精神薄弱児のための寮を開設した。その花は貧しくとも、この世の風霜に耐えて咲け」と願い、秋の開設にちなんで「のぎく寮」と名付け、庭の隅に「風の中に一本のマッチの火を守るがごとく」と立札を置いた。公的補助をいっさい受けない個人の任意施設であった。彼は一家を挙げてそこに移り住み、「のぎく寮」は近

藤の家庭そのものとなった。昭和三七年、彼は定年を待たず三四年間に及ぶ公立学校教員の生活に終止符をうち、寮を学園と改めて精神薄弱児の教育に専念することともに、その退職金のすべてを注ぎ込んで成人のための「なずな寮」を設立した。学校と寮を一本化し、子どもから大人までの一貫した精神薄弱教育の理想を実現させたのである。

### のぎく散る

昭和三八年、のぎく学園創立一〇周年の記念行事を盛大に終えたその翌年、多年にわたる心身の酷使は遂に病魔のおかすところとなつて、入院。そして、一時帰宅した五月十七日の朝、妻のえい子に「お椀で白めしを食べたい」と言った。思えばこの一〇年余り、ずっと子どもたちと同じ麦飯を、同じアルミの食器でとり続けていたのだった。

午後、静まりかえった「のぎく学園」の自室で「疲れた。今後が耐えきれない」と悲痛なことを遺してわれとわが身を絶つた。近藤がその教育実践の中から提唱した「のんき・こんき・げんき」は、今や広く精神薄弱教育に携わる人びとの間で、自らを励ますモットーとなつているが、その三気の重要さを知り



尽くした彼にしてなお、精魂尽き果てたのである。先生の死を知らされて、死とはどんなことか理解できない子どもたちが、三日三晩、学園のまわりを「せんせい、せんせい」とあらん限りの声をはりあげて、暗い闇の中、近藤を探し回ったという。

わがいのの／おわりの日に、さ／神、おてが／ずん、は／れ／そのひと／すけす、あ／み／ま

「のぎく学園」はその後えい子が受け継ぎ、養護学校が義務化された昭和五四年まで続けられた。その二五年の間に、近藤一家と生活をともにした精神薄弱児は百数十名を数える。近藤が五七歳の生涯を閉じるまで実践し、思索する過程で書き記した「子どもと生きる」「この子らもかく」等不朽の著書は「近藤益雄著作集」全八巻にまとめられている。また、彼は文部大臣表彰、ヘレン・ケラー賞、読売教育賞など多くの賞を受けた。

【参考資料】「近藤益雄著作集」全八巻（長崎県教育センター所長 塚野克三）



# 名利を超えた清廉な教育者

## 井 芹 経 平



業生東郷彪であることは明瞭で、今なお教育美談として語り伝えられている。

井芹は、日露戦争のころ、東郷平八郎の長男を済々黌に引き受け、親しく私塾『二三学舎』に寝食を共にして監督した。そのような師弟の間柄であったからこそ、卒業後の進路決定に当たって、当時飛ぶ鳥落すほど名高き元帥に向って、あんな思いきったアドバイスができたであろうし、また東郷父子も快くそれに応じたのであろう。ちなみに、現在、済々黌に所蔵されている東郷元帥の『至大至剛』の揮毫は、今息の卒業記念に東郷家から寄贈されたものであるといわれている。

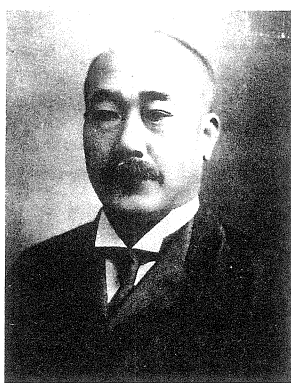
### 二、熊本の教育界に新風を吹込む

井芹経平は、慶応元年五月一日、熊本県上益城郡甲佐町の名門（造酒業）の三男として生をうけ、幼少のころからすこぶる英悟、小中学ともに抜群の成績で業を卒業、明治一六年衆望を負って進んで、東京高等師範学校に学び、ここにおいても天稟の才気はいよいよさえを見せ、常に首席を占めたので、校長山川浩は、井芹の傑出せる人物と、その才気に対して深く矚目するところがあったといわれている。

明治二一年四月、その業を卒業すると、文部当局はその才幹を認め、直ちに欧米留学の内意を伝えたが、井芹は済々黌長佐々克堂の懇請黙止しがたく、決然名利を顧みず信義に生さんと、文相森有礼の許可を得て西陲の私立済々黌の教諭として赴任した。

井芹の母校であり県下唯一の正則中学であった県立熊本中学校は、明治二一年三月をもって廃校となり、それに代わって、佐々らによって創立された私立済々黌が、当時の文相

明治二一年四月、その業を卒業すると、文部当局はその才幹を認め、直ちに欧米留学の内意を伝えたが、井芹は済々黌長佐々克堂の懇請黙止しがたく、決然名利を顧みず信義に生さんと、文相森有礼の許可を得て西陲の私立済々黌の教諭として赴任した。



済々黌創立者 佐々友房(克堂)

森有礼の計らいにより国公立同等の異例の認可を得て、県下唯一の尋常中学校として脚光を浴びていた。この当時の済々黌教師陣はある方面での碩学大家はいいても、普通科の正式教育を受けた者はいなかった。このような時に、最新理科学の知識と二三歳の若さで、英氣さつそう壇上にのぼった井芹は、たちまち生徒欽仰の的となった。また東肥教育会などにもよく出席して、物理・化学・地文・心理

### 一、人を見る明

昭和三五年秋、数学者として文化勲章を受けた岡潔は、その著『春宵十話』に次のような文を載せている。

◎吉川英治さんのこと

授章式の翌晩、池田首相の招待で晩さん会があり、忙しい池田（勇人）さんの代わりに荒木（万寿夫、文相）さんが主人役をつとめてくれた。この席では吉川さんと、昔のだけそれは偉かったという実例として、熊本のある中学校長の名が持ち出されたりした。この校長は、東郷元帥の息子さんの顔をじつとみつめて「東郷さんあなたの前だが、息子さんは百姓をさせるのが一番よいなあ」といいた。東郷さんもそれを受け入れて、新宿御苑の菊作りをさせたのである。

さてこの文中に出てくる「熊本のある中学校長」と「東郷元帥の息子さん」が、済々黌第五代黌長井芹経平と、同黌明治四〇年の卒業生である。

学などの講義を行ったので、旧藩時代の学風の多く残っていた県下の教育界に新風を吹込んだといわれている。

### 三、教育活動前期

井芹の済々黌在職は私立・県立時代を通じて前後三五年にわたり、その間、自他ともに創立者佐々克堂の後継者を以て任じた。すなわちその教育精神——三綱領（一、倫理を正しうし大義を明らかにす。一、廉恥を重んじ元氣を振う。一、知識を磨き文明を進む）——の実践と、質実剛健・簡易素朴な黌風の育成にあたったが、その教育活動は明治三三年を境におおむね二期に分けることができる。

その前半期は済々黌から熊本中学が分れるまでの一三年間で、初め教頭として佐々・木村・八重野三代の黌長を補佐し、次いで第五代黌長として、県下尋常中学教育の施設を漸次済々黌に統合し、一方私立から漸次県立に移行せしめ、さらに熊本中学校をはじめ、八代・鹿本・天草などの分校、それに私立女子では尚綱校をそれぞれ発展的に分離独立させることに尽力した。

### 四、教育活動後期

その後半期は、済々黌が現在地の新黌舎に移って以後二三年間で、済々黌も守成の期に入り、むしろ教育内容整備の時代であったの

で、その方面の充実と発展に力を注ぐとともに、徳富蘇峰が『熊本教育の双壁』と推称したように、分身熊本中学校長野田寛とともに、隠然県下中等教育界をリードしていった。

明治三三年済々黄が藪の内から黒髪の上に、井芹はますます気を新たにして鋭意その経営と発展に精励したが、同三六年二月八日、不運にも、前年秋の大演習には外国武官の宿舎ともなり、西日本一を誇った全黄舎が烏有に帰するという大厄に遭遇した。その時、井芹は、少しも周章ろうばいすることなく、直ちに応急の策を講じ、授業を開始するはもろろん、万遺漏のない処置をとったことは識者の感歎がなかつたところであつた。しかし明治三七年一月から三九年六月まで、いわゆるバラック時代で、その困苦不便は真に言語に絶するものがあつた。それでもその間職員・生徒・父兄いささかも嫌悪の色を示さず、孜々として本分に励み、他の時代に比べてかえつて人材を輩出させ、また復興ぶりの目覚ましかつたことは全く彼の才腕と徳化によつたというよりほかあるまい。

これより先、明治三四年、正科以外に奨学・運動の二部を設置したのは、今日の特別教育活動に先づきをつけたものといえよう。すなわち機関雑誌『多士』の発刊は奨学部事業の一環で、現在まで連続と継承されている。また生徒の読物として彼が著した『宮本武蔵』

五月に帰朝、大いに新うん奮を傾けてますます同黄発展に寄与せんとしたが、外遊中に患つた神経痛が悪化し、大正一二年六月、遂に勇退病を養うの余儀なきに至つた。

井芹勇退の報一たび伝わり、日室社長野口遵は、七万円の巨額を提供して、理想的な学舎設立を勧めている。これより先、井芹は明治二三年国会開設の記念として、すでに『二三学舎』を設け子弟を親しく訓育していたが、新たに学舎を設け、舎名はそのままとし、別に監督として済々黄教諭林田敏員の助力を乞い、厳格な中に極めて家庭的に教育指導に当たつていたが、再設四年目、大正一五年一月一四日、病重く遂に不帰の客となつた。越えて一八日済々黄は齋場を齋庭に設け、厳粛な黄葬の礼を執行し、永遠に済々黄を見守るのに絶好の霊地小峰の丘に葬つた。

## 五、井芹の偉大さ

井芹は生前全国中学校長会議において、乃木將軍をほうふつさせる風ぼうと、豪放いらく清濁併せ呑む人柄で断然異彩を放ち、その議論は重視され、「東の水戸に菊池謙二郎あり、西の熊本に井芹経平あり。」と日本の代表的教育家に挙げられていたことはよく知られた事実である。また彼は名実ともに本県教育界の長老であり、加えて社交性に富み、全国



井芹経平の胸像が建つ済々黄正面

の巻頭に「本黄平生新免武蔵を推尊して我が武道の宗師とす」と記しているように、剣道を訓育の根本におき、上級生には正課同様に課した。しかも、彼自身武蔵については単に崇拜するのみならず、円明流の兵法にまで深い研究を遂げ、また『独行道』をみずから体験したともいわれている。その他つとに熊本中学校長野田らと計り、熊本学生講武会を起すなど、県下武道の振興に尽した功績は大きかつた。

その他三綱領に加えて八条目の制定、黄歌の選定、朝礼の開催、新道文庫の開設、自省週録、課外授業、模擬試験、父兄会、家庭訪問、教場食事監督、黄内洒掃、兎狩、行軍等々が、機会を逸せず、実行された。そして生徒の学力向上・身体の鍛錬・情操徳性の涵養にひたすら邁進し、佐々によつて築かれた基礎の上に不滅の伝統、輝く歴史を飾るとともに、野田寛の熊本中学と一幹両枝の親しみの中、好箇のコントラストを示しつつ、熊本の教育をうちたてた名校長たる名をほしいままにしたのである。

大正六年七月、元来清貧に甘んじ、すこぶる恬淡な彼も、子息教養の恩顧に報いんとする財界の雄、山下龜三郎の、再にとわたる厚志を無下に拒みきれず、米国視察に上り、翌年

教育会、本県教育会、茗溪会、肥後奨学会、熊本美術会、武道関係団体等々の顧問、会長、支部長、評議員、理事として、これら各種文化団体のために尽瘁貢献した功績もまた、すこぶる大なるものがある。

済々黄では佐々を生みの親、井芹を育ての親として敬慕しているが、彼はただ済々黄のみの校長でなく、実は熊本県の校長でもあつた。否、その一生は、熊本県教育史そのものであつた。そうして、後代の教育者が渴仰実践すべき余りにも多くのものを持つていた。ここに井芹の偉大さがある。

なお彼は多技多能多趣味であつた。書画・骨とう刀剣の鑑定、さらには詩文、謡曲、園芸一として可ならざるものはなかつた。しかも筆をとれば、書に画に豊かな天分を示し、ことに百態の蘭を描いては専門家を驚嘆せしめたといわれ、大正一二年惜しまれて勇退したが、その心境を「清風明月に起臥して山高水長の大自然に融合した心境で、天下人事の至福である。」とのべ、まさに円熟の域に達した人柄の一面がうかがわれるようである。



熊本中学校初代校長 野田寛

○井芹経平先生伝(井芹経平先生伝記刊行会)

○済々黄百年史(済々黄百年記念事業会)

○熊本県近代文化功労者(熊本県教育委員会)

(熊本教育振興会長 本田不二郎)

# 教育に捧げた生涯 大分県女子教育の先覚者

## 岩田英子



明治四四年(一九一〇)四月、県下初の実科高等女学校として「私立岩田実科高等女学校」が発足した。その創始者が岩田英子である。

### 裁縫教育を志す

岩田英子(一八七三〜一九三二)は本名エイ、旧大分町で代々庄屋を務めていた家に生まれた。幼くして両親と死別、妹のキクとともに祖母トヨに育てられた。

大分高等小学校を卒業すると大分尋常小学校の簡易科教員となったが、一年で退職。明治二八年(一八九五)、婿養子計二郎が病死して未亡人になると、再縁の勧めを拒み、二三歳にして断髪、生涯貞節を貫いた。翌年、養

蚕研究家の浩を婿養子に迎えたキクは家督を譲り、養蚕に都合のよい中島に転居する。

元来子ども好きで保母を志していた英子は、明治三一年、大分幼稚園に勤務した。しかし唱歌の素養がないために指導力の不足を悟ると、翌年七月には退職して上京し、東京女子高等師範学校保母練習科の門をたたいた。ところが生徒募集は既に中止されていたため、帰るに帰れない英子は、裁縫教育に転向することにし、東京裁縫女学校(のちの東京女子専門学校、現東京家政大学)高等科に入学した。この時の決意が後の自分の人生を決することになろうとは、英子自身思いもよらなかつたであろう。その後は破格の短期履習をこなし、明治三三年二月に卒業した。これを基礎資格として、翌年には文部省検定試験に合格し、裁縫科中等教員免許を得るのである。

### 彼は學術、我は技芸

帰郷した英子は、大分高等小学校裁縫教員を退職して自宅で裁縫塾を開いていたキクを手伝ったところ、たちまち生徒が急増した。そこでこれを足場に、学校設立の企画を実行

に移すことにした。ところが、前年の高等女学校令の公布により、大分には明治三三年四月に県立大分高等女学校が開設されたばかりで、二校併立は冒険と危惧する者もあつた。しかし英子は、「彼は學術を主とし、我は技芸を以て生命とす」と、彼我の守備範囲を明確にして周囲を説得、同年七月、ついに「私立大分裁縫伝習所」を発足させた。こうして県下女子教育草創期に、当時としては全国的にもまれな女性教育家が誕生したのである。

### 躍進と家族の支え

当時の学則によると、裁縫のほか家事・国語・算術・修身が正科で、作法・茶道の随意科も設けており、当初から裁縫専修の方針ではなかつたようである。「技芸を以て生命とす」とはいえ、広い教養の上に立った技芸の養成を目指したのである。

年二月現在の生徒一二八名の出身地は、扇城女学校のある下毛郡を除いて全県に及んでいる。明治三七年の裁縫専科正教員合格者の大半はこの学校の出身者で占められ、既に県下裁縫教育界で不動の地位を築いていた。さらに明治三九年には学則を改正し、予科・本科・高等科・専修科を設置している。

その盛況は、天賦の才ともいうべき英子の経営手腕はもちろん、一家挙げての献身のためのものである。幼時より薫育を施した祖母トヨ、苦しい財政面を一手に引き受けた義弟浩、多忙な家事の合間に裁縫教授の手助けをした妹キク――彼らあつてこそ、英子は思う存分その才能を発揮できたのである。

なお、英子は後に姪の美智子夫婦(夫は後の学習院大学教授岩田九郎)を養嗣子として分家したため、キクの直系が岩田正、岩田英二と続いて、現在の岩田学園の隆盛につながっている。

次いで明治四二年、「私立岩田女学校」と改称。明治四四年四月には、高等女学校令の改正に基づいて「私立岩田実科高等女学校」を併置した。これにより、裁縫・手芸の中等教員検定受験資格を付与され、卒業生が直接、中等教員に登用される道を開いた。当時は公的な補助金制度もなく、年間経費と授業料収入の差額はすべて設立者の負担金で賄われている。

教育発展のために、英子は惜しげもなく岩田家の私財をつぎ込んでいたのである。

大正三年、校則を改正し、専修科・研究科を設置した。昭和二年には、生徒の裁縫技術の向上と習得の便を図るために、「和服裁縫参考書」を出版した。さらに昭和三年には、岩田九郎の手になる校歌を制定している。

### 情熱と先見

「うきことのはほこの上に積れかし限りある身の力ためさん」——英子が終生モットーにしたといわれる熊澤蕃山の歌である。

どうすればよりよい教育が施されるか、英子は苦心し、工夫を凝らした。そしてその教育方針は、常に当時の教育界の実情と要請に合致し、しかも時代を先取りしていた。

その一例として、大分裁縫学校主催の明治三十四年（一九〇一）の夏期一か月講習会が挙げられる。実業教育・女子教育の必要性が叫ばれる中、東京帰りの英子のさん新な裁縫教授が人気を呼び、正教員免許取得を目指す県下の裁縫教員が先を争って受講。その結果、多数の受講生が検定試験に合格するという実績が生まれ、大分裁縫学校の名を揺るぎないものにしたのである。

六歳から、近所の教会牧師の妹に英語を学び、また一七歳からは個人教授について漢学を習得するなど、常に自己研さんに努めている。教育活動に社会活動にと、多忙な英子であったが、風流面でも非常にたしなみが深い。茶道はすでに一二歳、華道は一九歳のころに学んでいる。その他にも刺繍、染物、琴、謡曲、日本画、書道、俳句、盆石、園芸と、その趣味は実に多方面にわたっている。

「何でもやる、負けるのが嫌いだ。人がやるのに自分がやれぬことはない。だれよりも先にならねばいかぬ。それで、やりだしたら一生懸命にやる」——英子が公的活動も含めてこれほど多方面に心身を投じたのは、そのおう盛なチャレンジ精神によることはいままでもないが、それだけではあるまい。幼くして両親に死別し、若くして夫に先立たれたわびしさを内に秘めていた英子の心は、つれづれに時をすこすことに耐えられなかつたのではないだろうか。英子の多趣味は、時間をもてあました風流人の手すさびではなく、まさに「忙中閑の遊び」であつたのだろう。

### ホントの人間に

「いちばんの楽しみは、どこを歩いていても、りっぱな奥さんになつた教え子の人たち



岩田英子の遺墨

### 多方面の活躍

英子は自校の充実発展に力を注ぐだけでなく、例えば大分医師会主催の看護婦養成のために自校を夜間に開放提供するなど、社会教育のためにも協力を惜しまなかつた。また大正九年（一九二〇）には県教育会評議員となり、県下の教育全般にも尽くした。

一方、明治三十四年（一九〇一）には同志と大分婦人会を起してその評議員となり、同三十七年には愛国婦人会特別会員に列して、同会大分県支部評議員囑託となつた。

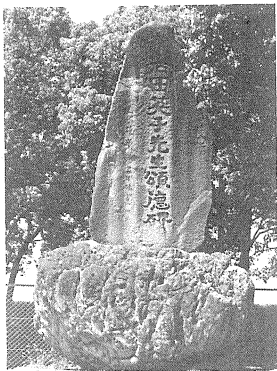
昭和三年（一九二八）、昭和天皇即位の御大典に際して、女子教育に特に功労ありとして「藍綬褒章」を賜る。翌年にはその拝受記念と創立三〇周年を祝して、講堂を卒業生一同から寄贈されている。さらに、昭和六年、愛国婦人会総裁から「一等有功章」を贈与される。ほかにも日本赤十字社特別社員、日本赤十字社篤志看護婦人会大分支部副会長、大分連合婦人会会長などを歴任した。

老いた祖母のめんどうを見、妹に学問をさせるために上級学校への進学を断念した英子であつたが、やはり向学心は捨て切れなかつたのであろう、一四歳ごろ、大分中学校教師ウエンライトに英語を学んでいる。その後も一

からライによびかけられる時です」——大正九年（一九二〇）、創立二〇周年にあつた、「質実・勤勉・貞淑・温雅」の校訓が制定されたが、はからずもこれがそのまま英子自身の人徳を表していると言えよう。「人に接するや謙讓、子女を見るや慈仁」、これが英子の人柄にふれた人々の共通の印象であつた。

英子は「勝氣を理性で包んだような人」とよく言われ、向こう気の強さが伝えられているが、幼少のころは内気でおとなしい性格であつたらしい。それが、成長するにつれて強気な性格に変わつていったと言われる英子の生涯を思うとき、運命のいたずらというものを感ぜずにはいられない。

昭和七年（一九三二）、六月半ばから病床に就いていた英子は、遂に九月二二日、帰らぬ人となつた（享年六〇歳）。臨終の言葉は「食うていくばかりでなしに、ホントの人間にならなさいよ」——学校教育だけではなく、まさに人間教育に全精神を傾けた生涯であつた。



徳富蘇峰揮毫の「岩田英子先生頌徳碑」

#### 【参考文献】

- 岩田女学校校長伝記編集委員会（乾政雄）編『岩田英子先生』大分合同新聞社編『大分県人物伝』
- 西日本新聞社編『大分人脈』
- 山川出版社編『大分県の百年』
- 大分県教育委員会編『大分県教育百年史』
- （大分県教育委員会文化課指導主事 田本政宏）

# 社会福祉事業の先駆者 孤児の父

## 石井 十次



### 縄の帯

現在のような豊かな時代と違い「福祉」という言葉さえ定着していなかった明治二〇年に、弱冠二二歳の身で、孤児救済の事業に着手した人物がいた。彼は岡山孤児院を創設し、大阪に愛染園託児所、郷里宮崎県に茶臼原孤児院を経営し、日本における社会福祉事業の先駆者として、孤児教育にその生涯をささげたのである。

この人物の名は、石井十次。慶応元年（一八六五）四月一日、宮崎県児湯郡上江村（現高鍋町）馬場原に生まれた。高鍋藩士の父方吉、母乃婦子の長男である。十次の生家は馬場原に現存し、史跡として県指定文化財となっている。

少年時代の十次は、体格も優れ腕白に育ったが、また、きわめて純情であった。七歳のころ、天神様の秋祭りに、母の心づくしの新しい着物につむぎの帯をしめてもらって出かけた。ところが帰ってきた十次は縄の帯をしめていた。友だちの松ちゃんも縄の帯をしめていて、みんなから、からかわれていた。取り替えてやったのです。との説明に、母は、「それはよいことをしたね」とほめて喜んでくれた。このときの言葉が成長していく十次の心に大きな感動と影響を与えることになった。母乃婦子は、困っている村人に常に温かい手

の苦労は並大抵ではなかったのである。医学の継統が、孤児救済かと迷っていたが「人は二主に仕えることはできない」との聖書の教えに従い、六年間学び続けた医学書、ノート類のすべてを焼き、年来の苦悩を精算した。当時孤児は五一名であったが、明治二四年の濃尾地震で九三名を加え、二六年には二二〇余名を救えた。二八年、それまで苦業とともにした妻品子は三人の娘を残して病没している。

その後、院児による音楽幻灯隊を組織し、国内各地ばかりでなく、国外（ハワイ・台湾等）にまで公演活動を広げ、孤児たちの持つ能力を発揮させるとともに、実情を社会に訴えた。明治三七年に始まった日露戦争による多くの戦争孤児と、三八年の東北地方の冷害大飢饉で八〇〇余名を受け入れ、岡山孤児院は、一二〇〇余名の大家族となった。

明治一七年、新島襄の「同志社大学設立趣意書」を読み、今後の世での教育の重要性に思い至り、郷里に人物養成のための教育会創立を決定する。同年夏帰省し、村人に熱心に訴え、馬場原教育会を設立、「朝晩学校」を始めた。昼間は田畑で働き、朝、夕の余暇に学ぶという意味の名称である。このように、よい事だと考えたことは、即実行という性格は、生涯を通じて変わらなかった。

### 一二〇〇人の大家族

十次が岡山医学校を卒業し、岡山市近郊の上阿知診療所に代診で勤めていたとき、隣の大師堂で三人連れの母子巡礼とめぐり会い、男の子を引き取り世話することになったのが孤児教育との出会いであった。その後、薄幸な子を加え、市内の三友寺に「孤児教育会」の看板を掲げ、救済事業を始めた。



食事風景

一が来日して、各地で行った講演の内容を聴き、感動した十次は、日本のミューラーになろうと決心した。

しかし、孤児の世話は、生やさしい事ではなかった。衣食住への心くばり、経費の調達

十次は、不幸な災害にあり、父母と離れた子どもたちにただ住む家と食べ物だけを与えることを考えていたのではなかった。父母に代わって、心と体が健康で、教育を受け、職業技術を身につけた社会人の育成を考えた。すなわち、養育―教育―自立をねらいとしたのである。

幼年時代（遊ばせる）少年時代（学ばせる）青年時代（働く）という「時代教育法」に思い至ったのは明治三〇年ごろであった。この方針を実現させるため、私立岡山尋常高等小学校

を孤児院内に開校（三〇年二月）した。校長に高山甲子郎を迎え、後に亀山佐太郎（岡山師範訓導）により充実進展を見たのである。注目すべきは、岡山孤児院からの小学校就学率一〇〇%の事実である。一般家庭の子弟の就学（参考・明治三三年八一・五%）でさえこれほどでない当時の社会においては希有の事に属する。

古今内外の教育家、宗教家、社会事業家等諸先輩の研究実践を考究消化し、教育一二則を定め、岡山や茶臼原において実施した。特筆する項目として、家族主義、満腹主義、実行主義、非体罰主義等がある。

例えばバーナード孤児院の制度を取り入れ、子ども一〇人ぐらいのまとまりに、主婦一人を割りあてて一緒に生活させ、家庭の雰囲気を楽しむ家族主義を、また、善を賞し、悪をいましめるときは、必ず人のいない所で、十次と二人で坐してする今でいうマンツーマン教育を、そして子どもは、大人のまねをするもの、家庭、学校で教師、主婦は必ず行いによって導くとした実行主義等々、古今を通じて揺るがぬ人間教育の理念・方法の多くをみるのである。

### 理想郷の建設

孤児院創設のころから、郷里において、理想とする「鐵錘主義教育」（生活に必要なものは自分たちの手で作る）の実行を考えていた。明治二七年第一回移住者約三〇名を以て、

白原で開墾作業に取りかかった。原野の開墾は難作業で、この隊に指導者として加わっていた山室軍平氏（後日本救世軍創始者）の手記によると、『その労苦、筆舌につくし難し、されど精神的によく統率せられ、大自然の中でよく頑張った』と記されている。

明治四十三年に、この茶臼原に岡山孤児院移



石井十次の銅像（3人像）

転を決意した。大事業であった。

岡山市旭川河口から日向灘を越え、高鍋町小丸川河口に陸揚げ、荷馬車で八畑のこぼ道、急坂を運んだ。広野に数十棟の宿舎、学校、集会所が出現し、大正元年春、女子部

かつ学ぶこと」「人は同胞なればお互いに相信し愛すべきこと」「天恩に感謝し、禁酒禁煙を實行すること」の茶臼原憲法を守って生活した三五〇名の孤児は、自給自足の目的を達成している。

### 愛情の儉約を知らぬ男

十次の生き方、思想に影響を与えたと思われる人物を日誌から挙げてみると、郷土の先輩はもちろんであるが、萩原百々平、西郷南州、ジョン・パウング、ジョージ・ミューラー、モーゼ、キリスト、ベスタロッチ、ルソー、クロムウェル、徳富蘇峰、山路愛山等多くを数える。孤児教育の初期に、ジョージ・ミューラー、ベスタロッチ、ルソー等孤児教育の先輩の理念、行跡を見聞し、彼等の著書、伝記の読書から、これほどの見識を抱いた十次の鋭い感受性、受容力は驚きのほかはない。

十次の死没に際して送られた、徳富蘇峰、山路愛山、留岡幸助、山室軍平氏等による平辞、記念講演における石井十次観には、

「君は日本で一番見識のある、腹のしつかりした信仰の固い、慈善事業家であった。新時代はこの道の魁けをなした人、君の孤児救済事業は、その規模の大なること、成功の著しいことにおいて分類がない。逢う人、触れる者に対して、持てる愛情を悉くしぼり出した人、愛情の儉約ということを知らない人である。

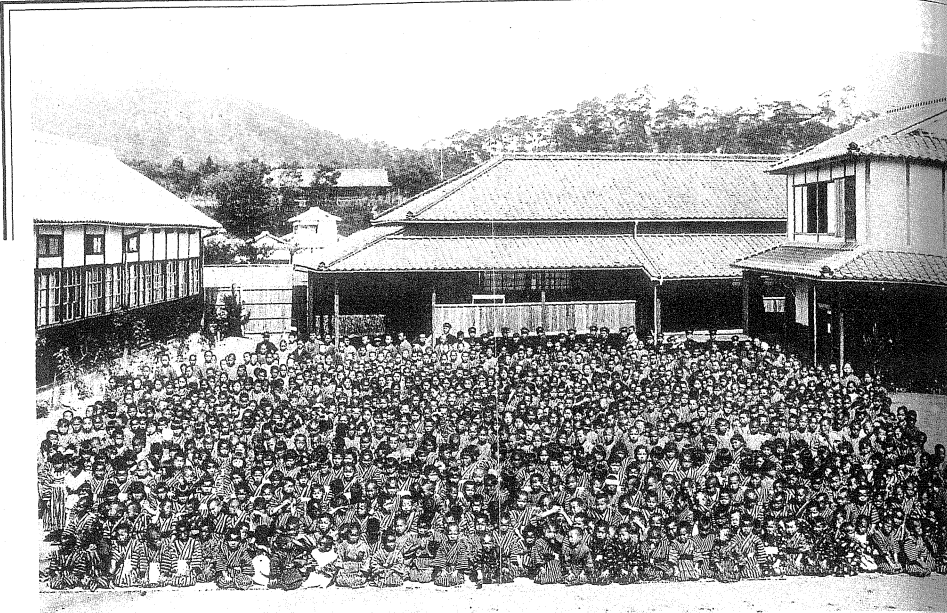
### 石井精神の継承

十次は、長女友子に男子誕生（児嶋城一郎）の報に接した日、大正三年一月三〇日、四九歳でその生涯を閉じた。その後、記念諸事業が起こされ、大阪に財団法人石井記念愛染園が、岡山と茶臼原に石井記念協会が設立された。

そのほか銅像の建立、記念の催しが行われた。以来三〇有余年、昭和二〇年八月、終戦時に、孫嶋一郎は、東大文科を出て応召、最後の任地が十次の生誕地高鍋であった。祖父十次の霊が彼に何を告げたのか。柿原政一郎氏（元高鍋町長、県議会議長、衆議院議員）の勧めを受け、岡山の大原総一郎と相談し、岡山孤児院を引き継ぎ、社会福祉法人、石井十次記念友愛社を設立した。そしてまず、戦災犠牲児の収容から始めたのである。現在、県内に、養護施設二か所、保育園五か所を経営している。町内外には、各所に銅像、胸像、詩碑、記念館の建立が見られ、財団法人石井十次顕彰会による、生誕記念式典、講演会、シンポジウムなどを行っている。学校においては、「石井十次をしのぶ会」の開催ほか諸行事への参加、道徳の時間への導入等によって、「思いやりの心」の育成に資している。

顕彰会では、ボランティア精神、生涯をかけた人間愛の継承・浸透と福祉意識の高揚を図るため、児童福祉への貢献を表彰する「石井十次賞」を創設し全国に呼びかけている。

（高鍋町教育長 岩水高徳）



1200人余りの孤児で一杯の岡山孤児院（明治40年）

# 教育界の礎として

中等・高等教育の父

# 岩崎行親



心友、内村鑑三

岩崎行親は、明治九年（一八七六）、文部省直轄の英語学校（のち大学予備門、旧制第一高等学校、現東京大学の前身）の同級生、太田稲造（後の新渡戸稲造）、内村鑑三、それに植物学の世界的権威で文化勲章を受章した宮部金吾の四人と親交を結んだ。

この四人は、身を立て道を行い、酒色を慎むという盟約を結び、「立行社」と名付けた。明治の青年らしい覇気である。翌明治一〇年（一八七七）、この四人は北海道に渡り、札幌農学校に入學、ポロイズ・ビー・アンビシヤスで有名なクラーク博士らの薫陶を受け

ることになる。

岩崎行親、号は岳東。安政二年（一八五五）、香川県三豊郡比地大村（現豊中町）に生まれる。父政行は、明治維新の際、神官の身で国事にも奔走した人。行親は少年時代、父が新撰組に捕らえられ、生活に困窮したため京都で公家の小侍となり、そこで国学、漢学を修めた。維新後、明治三年（一八七〇）、一四歳のとき、両親（父は太政官出仕となる）とともに東京へ出て、前記三人らと英語学校の生徒となり、終生の交わりを結ぶ。

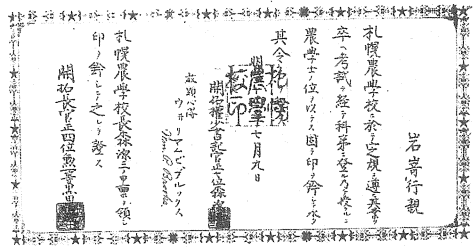
わけても、内村鑑三とは、両者のその後の言行や業績が示すとおり、思想、信仰上の対立はあったものの、肝胆相照らす心友であったことがうかがわれる。

内村鑑三が、大正一五年（一九二六）、岩崎の古希祝賀会に送った書簡で、「……札幌農学校在学中、私どもは精神的に一大事件に遭遇した。それは西洋の宗教たるキリスト教の勧誘であった。私も同級生二〇有余人中半ばはこれに応じ、半ばはこれを拒んだ。そして岩崎君は拒みし仲間の一であり、私は応ぜし者の一人であった。……私の友人中で岩崎君が最も善く私の日本魂（ニッポンコン）と読んでほしい。『ヤマトダマシイ』には語弊がある。』を分かってくれる者である。それは君自

身が日本魂の魂であるからである……。」と述べている。そして、その書簡は、『百年の半ばを共に過ごしてきて、うれし涙にむせぶきょうかな』で結ばれている。

## 名知事との出会い、鹿兒島へ

明治二七年（一八九四）三月、岩崎に文部省からの使いがくる。文部省には、鹿兒島県知事に任命されたばかりの旧上総一宮藩主で子爵の加納久宜が待っていた。鹿兒島に中学校ができるが、校長の適任者がおらず困っている。是非赴任してほしい」とのことであ



岩崎行親が札幌農学校を卒業の際受領した卒業証書

る。札幌農学校卒業後、北海道、大阪府で官吏となったが、病を得て退官し、東京で私塾を開いていた岩崎を、加納知事に推薦したのは時の文部次官牧野伸顯（のち文相・農相・宮相を歴任）で、その橋渡しをしたのは杉浦重剛（当時日本中学校長、のち東京官学問所御用掛）であった。時に岩崎三九歳。加納知事には「病後のことでもあり、老母（父はすでに他界）の承諾を得てから」と即答を避け、二三の友人と相談して帰宅してみると、「鹿兒島県尋常中学校教諭に任ず、年俸八百円」の辞令が届けてあったという。

この加納知事との出会いが、岩崎の鹿兒島行きを決意する契機となるわけであるが、ここで、加納知事について触れなければならぬ。加納久宜は、明治三三年（一九〇〇）九月まで六年八か月の長期にわたって県政に尽くす。着任当時、県政界は吏党・民党の政争が激化し、県政は空白化していた。加納知事は、不偏不党の立場で人事の刷新を図り、ワラジばきで県内をくまなく回り、農・畜・水産の振興、就学の奨励、職業教育の拡充など今日の鹿兒島県の経済、教育の基盤を形成した功績は大きく、県民は今なお彼を「殖産興業知事」として顕彰碑を建てて、その遺徳をたたえている。知事在任中は一日の欠勤もせず、県政のため加納家の私財を投じて二万円

の巨債を負い、晩年、鹿児島のことはいまに電報せい」と遺言したほど鹿児島を愛したという。

岩崎行親は、この加納知事の熱誠にこたえて、教育と勸業の知事顧問格として、鹿児島尋常中学校（後の鹿児島一中、現鶴丸高等学校）の教頭（一年後に校長）となり、鹿児島での第一歩を踏み出す。着任当時は、岩崎自身の思い出によると、出発の際、牧野文部次官から、「このたびは遠方の所に誠に御苦労である。また、病後のことで授業など一時間くらい受け持てばそれでよい。近くに温泉もあるから入浴しながら通勤されよ」と言われたにもかかわらず、毎週一八時間の授業を担当し、校長や教頭の仕事もやり、学校の仕事が終わると県庁へ、県庁での仕事を終えると知事官舎へ行き、知事と産業上の改良案や実施の方策を練った。牛馬防疫、米作改良、排水工事、種苗改良など、農業の諸問題について知事と夜を徹して意見を戦わしたことが多かったと言っている。

### 中等教育の普及と造士館の復興

鹿児島では、明治一〇年の西南の役で、西郷隆盛率いる私学校党が敗れ、多くの優れた人材が失われた。そして、県教育界もその発展が著しく阻害された。鹿児島が、この敗戦

は故あって（旧藩主島津家の反対かと思われるが真相は不明）廃校となった。

岩崎は、この高等中学造士館を復活して高等学校にすべきだと県議会に建議し、ついに明治三四年（一九〇一）四月、全国第七番目の旧制高校として創立に成功、初代館長（校長）として教授陣を充実し、質実剛健の校風をつくりあげる。

### その晩年、ユニークな学校づくり

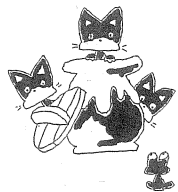
岩崎行親は、幼少から胃病を患い、この持病が悪化したため、一一年余勤めた造士館長を大正元年（一九一〇）に辞し、千葉県の海岸で静養する。そこへ、大阪で海運業を営む田中省三（鹿児島県始良郡福山町出身、小学校教員から実業家となる）から、郷里の福山に中学校をつくりたいので御協力願いたいと懇請される。大正六年（一九一七）の初秋のことである。岩崎にとつて鹿児島は第二の故郷でもあり、私立福山中学校（現、県立福山高等学校）校長として、再び鹿児島の土を踏まざるをえなくなるのである。

学校経営の一切を任せられた岩崎は、雄大な桜島を臨む景観の地に学校敷地を選定し、大部分の生徒を寄宿舎に収容、その周囲に教師

の傷手から立ち直るには、まず、教育界の陥没した人材を補わなければならなかった。そのため、在京の先輩や歴代知事は、教育条件の整備、優秀な教師の招へいに必死になった時代であった。

一方、加納県政の推進によって、小学校の就学率も、明治二七年五七％に過ぎなかったものが、明治三三年には九二％と全国のトップクラスとなり、小学校教育が普及するにつれて、中等教育の拡充がようやく県下各地の世論として高まってきた。

このような機運に沿って、岩崎行親が着任した鹿児島尋常中学校の設立を皮切りに、その後三、四年の間に、尋常中学造士館（高等中学造士館の廃止による。後述）、川内・加治木・川辺と尋常中学校の分校（のちそれぞれ独立）が続々と設置された。岩崎は、これらの学校の創設に尽力、創立時の校長を兼務している。



当時は、日清・日露両戦役前後の時期で、世情も騒然としており、また、入学者の大部分が士族出身（約八五％）で、年齢もまちまちであり、校内ではもちろん、他校生とのけんか、果ては、生徒の処遇をめぐる同盟休校も続出したと史料は記している。これら多くの学校を任せられた岩崎は、文字どおり東奔西走、在任九年、席の温まる暇もなかったであろうと想像される。

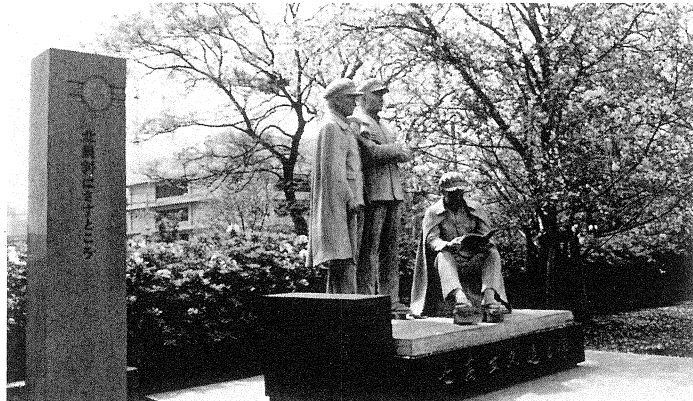
さらに、岩崎行親が県教育界に残した業績の中で、欠かせないものに、第七高等学校造士館（現、国立鹿児島大学の前身）の復興である。「造士館」は、安永二年（一七七三）、藩主島津重豪によって創設され、明治維新後は、種々の経緯を経て、高等中学造士館として受け継がれていた。

明治二十七年、「高等学校令」が公布され高等中学校は高等学校と改称されるが、明治二十九年（一八九六）九月、鹿児島高等中学造士館

の住宅を配置して、校内に「敬天塾」と名付けた塾をつくる。この塾では、「敬天愛人」を教育目標に、起居、応接、礼儀、作法、言葉遣いなどを徹底して教えた。地域住民からは「福山聖人」と呼ばれてあがめられ、「岩崎、福山中にあり」と聞いた県下の俊秀が、他校の入学を取り消してまで集まってきたという。岩崎行親は、大正一三年（一九二四）三月に福山中学校長の職を後進に譲り、昭和三年（一九二八）四月、自分が勤めた学校出身者中、出征して戦死した生徒の招魂碑を自費で建立し、その招魂式後倒れて七十二歳の生涯を終える。

級友宮部金吾は、「札幌同窓会誌」の「岩崎行親君小伝」の中で、岩崎のことを次のように結んでいる。

「君は臨終の床において、門下生に向い、日本の現状では死にたくない、後はよろしく諸君に頼むと遺言し、死に至るまで国を憂い世を思うてやまなかった。君の一生は実に救世憂国の一念をもって終始したといふべきである。」と。



鹿児島県歴史資料センター黎明館中庭に立つ七高生久遠の像

【参考文献】  
岩崎行親編「岩崎行親」

南日本新聞社編「郷土人系」／「鹿児島大百科事典」

鹿児島県教育委員会編「鹿児島県教育史」

関係各学校記念誌

（鹿児島県教育委員会委員・学芸専門員 谷崎哲夫）



# 沖縄県民の師父

## 志喜屋孝信



戦前、県立第二中学校長を経て、私立開南中学校を創立し、戦後は、沖縄民政府知事、琉球大学初代学長に就任し、多くの入たちに師父とあがめられた志喜屋孝信は、沖縄の人材育成と戦後の郷土復興に尽力した偉大な教育者であり政治家であった。

### 県内唯一の奨学生として

志喜屋孝信は、明治一七年四月一九日、具志川市赤道で父孝徳、母カマドの長男として誕生した。

幼少のころの志喜屋は、気が弱く、その上体も丈夫でなかったため、具志川尋常小学校に入学しても停級となり、一年あとの子どもたちと一年生からやり直さなければならなかった。しかし、その後、成績は優秀で、学年が進むにつれて、向学の精神に燃え、尋常小学校高等科、県立中学校、そして県内唯一の奨学生として広島高等師範学校（広島高師）へ進んだ。

志喜屋は、そこで数学、物理を専攻し、学問を極め、広島高師の校長の薫陶を受けて、教育者としての素養を身につけた。

広島高師を卒業したあと、明治四一年四月から八か月間、岡山県金光中学校で、同年一月から三か年間熊本県鹿本中学校で教鞭を執った。教壇にたつ志喜屋は、常に自信を持って子どもたちの指導に当たった。沖縄県内

唯一の奨学生という誇りと広島高師を常に優秀な成績で通してきた自信が身についたのであろう。そこでの志喜屋は、時に豪放で、時に親身な教授法で教え、多くの生徒たちから慕われていた。

### 県立第二中学校長時代

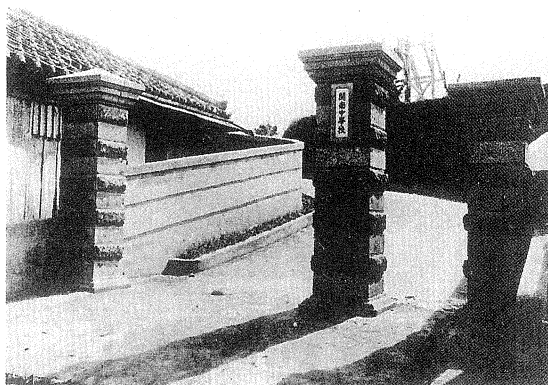
明治四四年一二月、志喜屋は、沖縄県立第二中学校に高良隣徳校長に請われて赴任した。

県立第二中学校は、当時唯一の中等教育機関であった県立中学校に希望者が多く、収容できなくなったために首里城内に分校として設置されていたが、明治四四年四月に分離独立した新設校であった。県立中学校は第一中学校と改称された。

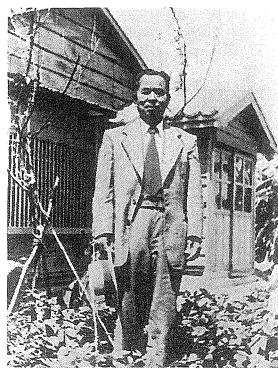
志喜屋は、この県立第二中学校で、大正一三年三月まで教諭、教頭を務め、同年四月、第四代校長に昇任した。

志喜屋校長は、英才教育を教育方針として、いかに多くの生徒を上級学校に進学させるかを目標にしていた。それは目に見えて成果が上がり、進学率は、常に県内でも上位を維持していた。

また、志喜屋校長は、師弟教育にきびしくのぞみ、成績順に席を決めるなど指導を徹底した。クラスをのぞけば、成績の優秀な者は、一目で分かるようにしたという。他の生徒に刺激をあたえるためである。自ら教壇に立つ



志喜屋孝信が創設した開南中学校の校門



1948年、那覇市の自宅の玄関先でカメラにおさまった志喜屋知事

ときも、分からない者には大声で叱咤し、校長室に呼んでさすこともたびたびであった。課外授業も積極的に進めていた。

学校の先生にあだ名はつきものであるが、志喜屋校長は、「ライオン」と呼ばれ、それはまさに獅子のごとくほえまくる様にピッタリのあだ名であった。

### 私立開南中学校を設立

志喜屋は、県立二中の校長を辞し、昭和一年四月、那覇市に私立開南中学校を設立し、自ら理事長、校長の任に当たった。私立中学校の設立の陰には次のような理由があった。

県立二中は、年々施設も充実し、勉学にスポーツにその名を高め、県下の学生たちのあこがれのまごとなっていた。そのため受験生は、入学定員を大きく上まわり、向学心に燃える多くの若者たちが学問の道を閉ざされていた。志喜屋は、これに深く胸を痛めていたのである。また当時、狭い沖縄から本土や海外に雄飛していく若者たちも多かったが、こうした青雲の志を抱いて旅立っていく若者たちに一定の知識教養を身につけて送り出したいと、志喜屋は、日ごろから熱い思いにかられていたのである。

志喜屋は、アメリカ合衆国カリフォルニア州において大成功をおさめた西原村出身の中谷善英氏の援助をおおき、私財を投げうって開南中学校を設立したのである。

志喜屋は、開南中学校では英才教育に合せて個性を尊重する教育を重要視した。また沖縄の発展は、海外移民によらなければならぬとして、移民指導者の養成を目標のひとつに添えた。そのため入学年齢の制限を撤廃して、海外の移民二世にも門戸を開いた。このように開南中学校は年々充実して、入学志願者も定員の二倍、三倍とふくれあがっていた。

しかし、順調な発展を続けてきた開南中学校も、昭和一九年一〇月一〇日の空襲のために校舎を焼かれ、爆撃から免れた一部の校舎も日本軍の病院に使われたため、どうとう最後の卒業式は挙行されず、そのまま廃校の憂き目をみたのである。

### 郷土の再建

昭和二〇年六月、鉄の暴風が吹きあれた沖縄戦が終わった。沖縄を掌握した米海軍は、戦争で混乱した住民の秩序の回復と、長期的な占領政策のために、住民の自治組織として、また軍政府の諮詢機関としての機能を担う「諮詢委員会」を同年八月に設置した。各地区の収容所から有識者が集められ、委員長や幹事、部長などが選任され、委員長には志喜屋が選ばれた。

さつそく一五名の委員は、米軍車両に乗って、各地区の状況を視察した。二五万人余の犠牲者を出した沖縄の戦場は一変していた。

興のために身を挺して取り組んだ。

特に農家の出身であった志喜屋知事にとつて農民たちへの思い入れは深かった。無償配給であった食糧が有償になり、賃金制がしかれるようになる、農民と俸給取りとの格差がでてくるのは目に見えていた。

そこで知事は、民政府内部の部長会議で俸給からの農村復興への一部拠出金を提案、軍政府にその旨申請した。この申し出を聞いた軍首脳は、いたく感動し、志喜屋知事の人道的な誠意に敬意を表して、一五〇〇万円の農村復興計画予算をプレゼントした。これは民政府総予算一億何千万円の約一割に当たる大金であった。

### 琉球大学創立の礎を築く

一九五〇年九月一七日、郡島知事選挙が行われ、平良辰雄氏が公選知事に選ばれた。沖縄民政府は、沖縄郡島政府に改称され、沖縄の政治は新しい方向へ進んでいくことになった。

志喜屋は、政治の場から再び教育界に入り、一九五〇年一月、前年から首里城跡に開学準備が進められていた琉球大学の初代学長に就任した。

戦後の混沌とした社会情勢のなかで、沖縄復興のために身を挺して捧げた五年間の労苦に対する軍政府の配慮と、教育者としての識



沖縄諮詢委員会のメンバー前列左より3人目が志喜屋孝信

特に中南部は、一草一木もない焼け野が原と化し、戦前のおもかげをひどくかからも残さず、戦争のおそろしさをいやというほど思い知らされた。緑豊かな郷土の再建の日は果たしてくるのか、各委員の心は暗かった。

諮詢委員のメンバーは、各地区の状況を視察し、報告書にまとめ、米軍政府に要請書を送った。それには ①分散家族の居所を至急判明するように講ぜられたし ②各地区とも医薬品の不足をきたしているからこれの整備をされたし ③火葬場の設置と棺桶の準備をせられたし、など四項目に及んでいた。

### 民政府知事として

一九四五年一〇月三〇日、これまで収容地区外への移動を禁止されていた住民に、待望の元居住市町村への移動が許可された。当然市町村における地方行政が必要となり、軍政府は、市町村長を任命して各市町村の統轄に当たらせた。これらの市町村の中央執行機関としての民政府が創設され、知事に志喜屋が就任した。沖縄県人が知事に就任するのは、戦前戦後を通じて初めてのことであった。なお、民政府の誕生に伴って、諮詢委員会は解消された。民政府といっても、軍政府がすべて実権を握っており、自力で住民施策を執行することはできず、単なる軍の代行機関にすぎなかったが、それでも志喜屋知事は、郷土の再建復



民政府創設のころの志喜屋知事（知事室で）

見が高く評価された学長の座であった。志喜屋は、「粉骨砕身、大学設立の使命達成に全力を尽くしたい」と決意を新たにしていた。そして、大学の諸規程の制定、施設の整備、教授陣の充実強化など寝食を忘れて奮闘し、創学の礎を築いた。戦前四〇年間、教育一筋に歩んできた志喜屋にとつて、最後の奉公となった琉球大学長の座は、水を得た魚のようであった。

一九五二年六月、任期満了により大学を退任したが、学長在任中にスタンフォード大学からドクター・オブ・ヒューマニティ（博愛人道主義者）の称号が贈られた。また、のちに志喜屋の業績を称えて琉球大学内に「志喜屋図書館」が設けられた。

一九五五年一月二六日、「浅学非才の私が」と常に謙虚な姿勢で世に処し、我が身の労苦に一片の見返りも求めず慈父のごとく愛情豊かな人道主義者であった志喜屋は、幾多の人材を世におくり、郷土再建の難事業に生命をかけ、果人としてたぐいまれなる偉業を残してその全生涯を閉じた。享年七十二歳であった。

（員志川市教育長 照屋寛吉）